

---

# どこからか、羽音

にやこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どこからか、羽音

### 【NZコード】

N8944R

### 【作者名】

にやこ

### 【あらすじ】

ある日突然、恋人の死を告げる少年が現れた。  
少年と私の、物語。

「 例えれば、」

情事のあと、眠りの中に居た私は彼の声にうつすらと目を開いた。背中に感じる、彼の体温。暖かくて、心地よくて、とても優しい。カーテン越しに部屋を照らす白い光が眩しくて、私はわずかに目を細める。田覚まし時計で時間を確認すると、短針はまだ四を指していた。

こんなに早い時間から体を起こすつもりなどない。そう思って、私は無言のままもぞもぞと体を動かした。外気に晒していた腕を布団の中に隠すと、彼はそれを横目で確認して微笑み、静かに目を閉じて続けた。

薄闇の中の、優しく囁くような声。頬を撫でるような穏やかな吐息。安心する。なんて、心地よい声なのだろう。私はわずかに目を細め、次の言葉を待つた。

「 例えれば、俺が死んだらどうする?」

なんて質問をするのだろう、と私は寝返りを打つて彼の方を向いた。そして彼の頬に、柔らかな髪にそっと触れ、どうするだろうね、と淡白に答える。

幼いころからの、少し低い抑揚のない声。

いつも可愛げがないと言っていた単調な私の口調を、彼だけは落ち着いた良い声だと黙つてくれた。穏やかで聞いていて心地がいいと。

私は生まれて初めて、自分の声を、口調を褒められた。彼が初めて、私が愛しいと言つてくれた。

「 ……あなたが死んだら、か。そんなの考えたこともなかつたわ。あなたが死んだら、私はどうなるのかしら」

少し考えて、あたしはまた口を開く。

「 きっとね、多分どうもしないと思つ。普通にお葬式に出て、涙も

見せないなんて随分と薄情な彼女だなって誰かに陰口叩かれて、それから、いつも通りの生活に戻るんだと思つ。……多分ね

今までだつて他人の葬式で泣いたことなんて一度もないもの、と私は続けた。友人との別れも、大切にしていたものが壊れても、ごく身近な人が亡くなつたときでさえ、私は決して涙を見せることはなかつた。

幼いころから、あたしは本当に泣かない子だつた。

怒られても叩かれても、何をされても泣かないものだから、瞳を潤ませることすらしないものだから、あんたの目には涙腺がないんじゃないの、などと言われたこともある。それも、嫌悪に満ちた口調で。けれど彼だけは、そんな私のことを気丈だねと言つてくれた。心が醜いからではなく、悲しみを感じないからでもない。それは心の強い証拠だと、そう言つてくれた。

私は生まれて初めて、この淡白な性格を褒められた。

「……私が死んだら？」

ぱつりと、あたしは言つた。

「もしも、私が死んだら。そしたら、あなたはどうする？」

彼は私と同じように、どうするだろうねと言つて笑つた。

いつもと同じ、気の弱い、困ったような笑み。私は彼の、この軟弱な表情が好きだつた。どこまでも穏やかで、静かで、優しい人。程よく筋肉の付いた腕で私を抱きしめて、彼は答えた。

「そんなの、その時になつてみないと分からないよ。

……だけど多分、ロミオのように自ら君の後を追うんだと思うよ。

まあ、ロミオのは勘違いだつたわけだけ。ジユリエットも可哀そうだよね、恋人の早とちりのせいでの自ら死を選ぶことになつてしまふんだから

あの話はあんまり好きじゃないんだけどね、と一言続けて、口を閉じる。

私も、あの物語はあまり好きじゃない。あれは泣きたくなるくらい、救いようのない物語だから。ハッピーエンドでなければいけないと

は思わない。悲劇の中にしかない美しさと醜いものもある。けれど、モンタギュー家もキャピュレット家も、ロミオもジオリエットも、好きになれない。あの一人は確かに愛し合っていたかも知れないけれど、酷く愚かだった。きっと、恋に落ちるにはあまりにも幼かったのだ。

……ああ、夜の空気が、まだかすかに残っているような気がする。なんだか、彼の甘い声に酔ってしまいそうだった。彼の香りに埋もれてしまいたくて、あたしは彼の胸にわざかにすり寄った。とくん、とくん。

彼の規則的な心臓の音があたしの頬を撫でる。

あまりの心地良さに、うとうととまた目を閉じてしまいそうになる。規則的に奏でられる彼の心音は、どうやら、私の子守唄にもなるらしい。

「……私が、死に際に『生きていって欲しい』って言つたら?」

私の頭を撫で、彼は少し迷うように唸り、もう一度どうするだろうねと呟いた。

「それじゃあ、君の死体を冷蔵庫の中に入れて毎日話しかける」とにするよ」

そうしたら生きていけるんじゃないかな、などと笑顔で囁く彼に、私は少し呆れの混じる笑みを向けた。

「まるで変質者だわ。ねえ、知ってる? 死体遺棄つて犯罪なのよ」「どうして人間の死体だと『保存』って言葉は使われないんだろうね」

直球で投げたボールを変化球で投げ返していく彼に、私はふふっと笑つた。そしてもう一つだけ、質問をした。

「それじゃあ、もしあたしがあなたに『死ね』って言つたら、どうする?」

彼は笑つたまま、躊躇いなく答える。

「死ぬよ。きっと、その言葉のままに死ぬんだと思う。最後に、君に深いキスをせがんで、熱い抱擁を求めて、犯して、殺して、君の

血をすべて飲みほして、そしてそれから、自殺するくすくすと笑って、彼は続けた。

「…それか、君の手で直接殺してもうつのも良いかもしないね。俺は生も死も、すべてを君にゆだねるよ。君のためだつたらきっと、惜しむことなく命を落とせる」

答えて、なんて話をしているんだろうねとあたしを抱く腕にきゅっと力を入れた。これじゃあ本当にただの変質者だよね、などと言いいながら。

直接に伝わつてくる彼の体温。

なんて氣だるい、情事の後。

「話を始めたのはあなたよ

「そうだつたね」

そうやつて、かすかな狂氣の中で共に笑い合つたのは一週間ほど前のこと。

彼は、死んだ。殺されたのだ。

深い深い闇の中に、彼は墮とされた。

愛しい人のいない世界は、時間は、まるで色彩を失つてしまつたようで酷く空虚。音声のない、古くて退屈なモノクロの映画の中みたいだつた。

彼と入れ替わりに現れたのは見知らぬ少年だつた。ファウンテン・ブルーの瞳が美しい、小柄な少年。

あたしと言葉を交わすよりも早く、彼は静かにこう言つた。

『君の恋人、亡くなつたよ』

愛しい愛しい彼の死を、伝えに来たのは青い瞳の饒舌な少年。

あたしは信じることを拒み続けた。

信じる必要性を、感じなかつた。

だから拒んだ。

いつまでも、彼は死んだと続ける少年に苛立ちながら。

けれど少年の纏つ香水の甘い香りに、あたしはいつもふわふわと、くらくらと揺らいでいた。

まるで、不安定な器に並々と入れられた液体のよう。足元の覚束ない、生まれたばかりの幼子のよう。

甘い香りに酔いしれ、あたしは今にも零れ落ちてしまいそうだった。

それは、とても身近なものだったから。

『俺はホントのコトしか言わないよ』

そう言つ彼の言葉は、酷く静かで穏やかだった。

どこからか、羽音がした。

1

彼の帰りを待っていた。

いつもと同じように、彼との家の、彼との部屋で。あたしの足元を、チャコールグレーの猫がうるうろと歩きまわっている。我が家のかな飼い猫 リトル・レディは退屈そうにうにやあと鳴いた。ソファーに座つてテーブルの上のリモコンを取り、なんとなくテレビを付ける。面白い番組なんて何にもやってなくて、あたしは次々とボタンを押し、チャンネルを変えていく。そして最後に、ニュース番組にチャンネルを合わせてリモコンをテーブルに戻し、ソファーの背もたれにくたりともたれ掛かった。

明日の天気や、どこか遠く離れたところで起きた事件なんかを何度も繰り返し、怠惰に流し続いている退屈なニュースを見るともなしにぼんやりと眺めながら、あたしは一人掛けのソファーにだらしなく座っていた。

「レディ、くすぐったいわ

長い尻尾であたしの足をふわふわと撫でながら歩き回るリトル・レディを抱き上げ、膝の上に乗せた。リトル・レディは嬉しそうに、あたしの頬をひとつぺろりと舐めた。この子はもともと、捨て猫だった。彼と一緒に出掛けた時になぜだか着いて来てしまい、そのまま家で飼うことになつたのだ。

しばらくの間は彼から離れようとしなかつたのだけど、最近ではあたしにも懐いてくれるようになつてきた。この子の種類は分からな

いけど、毛足が長くて人懐っこいとかは、少しソマリに似ているかもしれない。

リトル・レディの背を一、二度撫でて、もう一度テレビに視線を向ける。見慣れたアナウンサーのお兄さんが、どこそこでこんな事件が起きましたと至極真面目な顔をして言つ。ニュースというのは、何故こんなにも同じ内容ばかりを流すのだろうか。今朝にも見たはずのニュースを、どうこうつ詰かあたしはまた眺めている。

「……？」

ふわりと、香る。……香水？

「君の恋人、亡くなつたよ」

無防備だった。

柔らかなソファーに身を委ねていたせいで、その声に反応するのが少し遅れてしまった。だあれ？ とあたしはワンテンポ遅れた返事をして、振り返る。そこに居たのは青い瞳の少年だった。

……この香りは、オードランジュヴェルト？

シトラスやミントの甘さを秘めた、清涼感のある爽やかな香りがかすかに鼻腔をくすぐる。リトル・レディもその香りを感じ取つたのか、どこか楽しげにうなづかやあと鳴いた。

「…誰なの？」

「誰でも良いじゃん。そんなことより、君、『エリカ』だよね？」

この少年はどうして、あたしの名前を知つているのだろうか。……いや、そんなことよりもまず、この少年はどうやってこの家の中に入つて来たのだろうか。

あたしはソファーから立ち上がり、取り敢えず玄関と窓の鍵を確認した。ここは八階建てのマンションの五階だし、玄関の鍵も窓の鍵もきちんと閉めてある。物音だつて何もしなかつたはず。しかもオートロックだ。鍵も持たずに、ここに入れる訳がないのに。

あたしは一つの答えを導き出して、一か八かと穏やかな笑みを浮かべる少年に一つ問い合わせてみた。

「……どうして、あたしの前に現われたの？」

こんな突拍子もない質問に、彼は何といふこともなく口を開いた。

「『どこから入つて来たの』じゃないんだ。面白いね」

あはは、と少年は楽しげに声を漏らす。

楽しげに笑うその反応に、ならばこの答えは正しかったのか、とあたしは少し嬉しくなつて少年を見た。子供らしい無邪氣な笑顔に、あたしは少しだけ警戒を解いた。

少年の瞳は、まるで澄んだ湖の色を映したかのような綺麗な青。フーウンテン・ブルーの瞳は小波一つ立ちはしない。端整な顔立ちに映える淡い青が、酷く目を引く。少年がリトル・レディを馴れた手つきで抱き上げると、リトル・レディは一つ、少年に頬ずりをした。その様子に、人見知りをする子なのに、とあたしは少し驚いた。

「それじゃあエリカは、俺が何なのかもう分かつてんんだ？」

「何かは、だけね。どこの誰なのかは知らないけど」

珍しいこともあるものねと言つと、少年はそうだねと頷いた。

少年の柔らかなテノールの声は聞いていてとても心地が良い。子供特有の甲高い声ではなく、落ち着いた男性の声と言つてもいいだろ。けれど、それは十歳にも満たないであろう少年の姿からは酷くかけ離れていて、不自然だつた。

あたしはソファーにゆっくりと腰を降ろし、少年に隣に座るよう勧めた。無言でぽんぽんとあたしの隣の位置を叩くと、彼は素直に頷き、リトル・レディを抱いたままソファーに座つた。ふわふわと跳ねる茶色の猫つ毛。柔らかそうなそれに、あたしはそつと触れてみた。見た目通りの感触に、あたしは少しだけ目を細める。

「……エリカさあ、俺が最初に言つたことちゃんと聞いてた？ それが、俺がここに来た理由なんだけど」

「さあ。ガレットが死んだとか言つていたような気がするけど？」

「ああ。俺の話、ちゃんと聞いていたんだね。良かつた。俺はね、エリカにそれを伝えに来たんだ」

ガレットというのは、あたしの恋人の名前。甘い甘いパイの名前を持つ彼は、本当に甘くて優しい人。その優しさはすべてのものに向

いているものだから、あたしは時々嫉妬してしまった。

以前、彼と買い物に出掛けた時、彼は何かにつまずいて転んだ女の**人を抱え上げ、擦り剥いた膝に絆創膏を貼つてやり、そしてさらに**おまじないですと言つてその上にキスをしたのだ。それも、あたしの田の前で。問い合わせると、彼はきょとんとしてあれくらい普通でしょ、と笑つた。

リトル・レディの時もそつだつた。ガレットの後をふらふらと着いて来る痩せこけた子猫に気が付くと、彼はその小さな体を抱き上げて、誰もがクラリと眩暈を起こしてしまった。そのほど爽やかな笑顔を浮かべてこう言つたのだ。

『 帰るところがないのかい、小さな（リトル・）お嬢さん（レディ）？』

リトル・レディもきっと、その笑顔に眩暈を起こしたのだろう。ここに来てからしばらくの間は、追い出してやろうかと思つくらい彼にべつたりだつた。彼の横にちょこんと座つて、じぶじぶと甘えるリトル・レディを捕まえ、そこはあたしの場所なによと諭した回数は両手両足の指を足したつて足りないくらいだ。

彼は本当に、甘い甘いパイのような人なのだ。ちっぽけな猫でさえ落としてしまう、無自覚な女つたらし。

「それで、愛しい人が亡くなつたと聞いたご感想は？」

「別に。田を開けたまま寝言を言うことができる人もいるのねつていう新鮮な驚きを感じただけよ」

「あははっ。まあ、すぐには信じられないよね。だけど『冗談でも寝言でもないよ。俺は、ホントのことしか言つてないからね』

「そう、不思議ね。君の存在は信じられるのに」

クッションを抱きしめ、目を閉じた。

「彼は死んでなんかいないわ」

「どうしてそう言い切れるの？ 人間なんて、すごく脆い生き物なんだよ。どんなに健康な人でもどんなに強い人でも、いつ死んだつて可笑しくない。……俺も、君の恋人も、エリカだつてそうだよ。

今ここで、いきなり死んでしまったとしても何ら不思議なことじやないのに」

「……来週、あたしの誕生日なの。二十一歳になる。彼、言つたもの。『特別な日にしてあげるね』って」

「ふうん。それで、エリカは何を頼んだの？ ガラスの靴？ それとも、千匹皮の金の指輪かな？」

左右に揺れるリトル・レディの長い尻尾を田で追いながら退屈そうに言う少年に、なんだか少し苛ついた。

少年の人を小馬鹿にしたような口調や表情は、酷く癪に障る。あたしは思い切り少年を睨みつけた。少年はそれに気が付いていないよう、リトル・レディの尻尾を掴んでは放しを繰り返しながら続けた。

「馬鹿だね。人の生死には約束なんてものは関係ないんだよ。そんなもの、バットエンドの童話くらい不自然だ。そもそも、未来を確定させようとするその行為自体が間違っているんだから。

……人間ってさ、不安定なものとか不確定なものが近くにあると落ち着かなくなる生き物なんだよ。だから無意識のうちにそれをどうにかしようとするんだ。取り除くか、むりやり確定させるか、何らかの方法でね。そして、その確定させる方法のひとつが“約束”という行為。それ自体が酷く空虚で曖昧で不確かなものであるにも関わらず、それで未来が確定されたって錯覚して、安心するんだ。あはは、愚かしいよね、人間つてさー。」

「何よ、それ……っ」

一度怒鳴りつけてやるつかと、少年の肩を掴んだ。けれど少年は今までと何も変わらない穏やかな表情であたしを見続けている。そして、饒舌に語る。

「……一つ、いいことを教えてあげるよ。

『約束』って言つのはね、自分を安心させる為にするものなんだよ。自分の世界は今と過去だけで構成されている訳じやない、自分たちにはこれから的人生が、未来があるんだ、…ってさ。言葉によつて

未来を確定させることで、その自分の理想とする未来が確実にそこに存在するものなんだって思い込むために。

皆、自分の未来は誰かと共有でき、確実に楽しいものになるつて思いたいし、信じたいんだ。たとえそれが、どんなに空虚で曖昧なものだつたとしてもね。……だから人はいつも、誰かと『約束』をするんだ

……なんて悲しいことを言うのだろう。

思つて、その静かに紡がれる言葉にあたしは動きを止めた。

彼は、正しいことしか言つていない。

ガレットの生死に関する事はともかく、彼の言つていることは正しい。『約束』は、あくまでも予定であつて確実な未来ではない。百%のものなんて、存在しない。完璧ではないのだ。あたしは少年の華奢な肩からゆつくりと手を離した。頭の奥の方が、すうっと冷めていくのを感じた。

『約束』の在り方は、よく考えると酷く不自然だ。

……本当に、本当に簡単なことに今まで気付くことが出来なかつたのだね。

未来なんて、確定出来るものではないのに。

「……君つて、本当に嫌だ。憎たらしい

「どうして？」

オードランジュヴェルトの香り。

……ああ。これは彼が、あたしに贈つてくれた香りだ。

感情に任せて怒鳴りつけてやりたいけれど、もうどこをどう攻めればいいのかも分からぬ。甘い香りが、少年の静かな田が、あたしにブレークを掛ける。

「瞳の色がね、ガレットと同じなのよ。綺麗なファウンテン・ブルー。顔立ちも、少し似てるかな。……怒る気失せる」

はあと一つ溜め息を吐き、こちよこちよトリトル・レディの喉元を撫でている少年の頭に『コッピン』をした。パチンっ、と、小気味良い音がした。

「いってー！ 何だよ、何すんだよ！」

「八当たりの『コピン』よ。……そんなことより、君の名前、教えてくれない？ 君が何者なのかとかそういうことは別に興味ないから、偽名でも何でもいいのだけど」

少年は何だよそれ、と不貞腐れたように言った。まだ痛そうに額を撫でている。

そういうえば最近爪を切つていなかつたな、とあたしは爪の伸びた指先を見た。確かに、この指で『コピン』をされたら相当痛いだろう。後でちゃんと切つておかない。

「一緒に居る時間が少しでもある以上、取り敢えず便宜上名前が必要になるじゃない。呼びたい時に名前も知らないんじゃ、とても不便だわ。いつまでも『君』って呼ぶ訳にもいかないし、変じやない。それに『おい』とか『お前』なんて呼びたくないしね。そんな呼び方されるの、君だつて嫌でしょ？」

少年はあたしの顔をちらと見て、つんと唇を尖らせた。年相応のその表情に、思いがけず笑いが込み上ってきて、あたしはクスリと声を漏らした。少年はなんだようと小さくぼやく。

「で、名前は？」

「……それじゃあ、『ヘザー』って呼んでよ」

「変な名前」

「なら呼ばなくとも良いよ」

不服そうに口を尖らせる様子はとても可憐らしく。冗談よ、とあたしは悪戯っぽく笑つて見せた。

「ヘザー、ね。良い名前だわ。気に入った」

あたしはヘザーの頭から手を離し、立ち上がった。そしてくつと一つ、伸びをした。

「お茶入れるけど、飲む？」

「……お茶より『コア』が良い」

「了解」

言つと、すつ『くべ』甘いやつね、と付け足してあたしを見た。あた

しはもう一度了解、と笑んだ。

「お砂糖、いくつ入れる？」

「三つ」

「三つも？ まるで「ジモ……」

子供みたいね。

言い掛けで、相手が本当に子供なのだと思い至った。見たところ、十歳にも満たないようだ。いや、実年齢までは知らないが、何故だか子供の相手をしている気にならないのだ。どこかが違う。これは、そう。“子供”ではなく“子供っぽい人”を相手にしているような感じなのだ。“子供っぽい”、大人の人。一步引いて付き合うことのできる大人で、ながら、子供のような無邪気な表情を見せる人。

まさかね。

ただきっと、この子が少し大人びているだけ。

雪平鍋で牛乳を温めながら、食器棚からガレットと一緒に使つているお揃いのマグカップを取り出し、ココアの粉末を入れた。ココアの粉っぽさが残らないよう、温めた牛乳を少しづつ入れ、掻き混ぜる。時間を掛けて作ったココアは、ふんわりと柔らかな香りを放ち、鼻腔をくすぐる。

「ヘザー、できたよ」

「ありがとう」

落ち着いたテノールの声は、やはりヘザーの見た目には酷く不似合いだ。けれど、湯気の立つココアにふうふうと息を吹きかけている姿は年相応で、違和感がある。もしこれが可愛らしいボーイソプラノの声とかだったらここまで違和感はなかつただろうし、大人びているとも思わなかつたのかもしれない。

そう思いながら、ヘザーを眺めて一口、ココアを飲んだ。

猫舌なのだろうか。ヘザーは少しだけマグカップに口を着けたが、すぐに口から離し、再び息を吹き掛け始めた。

「ヘザーって不思議ね」

「何が？」

「本当に死んでいるのはあたしの方だつたりしない？ そして、貴方は死んだ事に気付いていない私を迎えてきた小さな死神」  
ヘザーはくすりと笑つてあたしを見た。

「エリカは生きているよ」

「それも、 “ホントのこと” しか言つてないのよね？」

「俺はウソなんか吐かないよ。口を閉ざすことはあってもね  
あたしはどうして、こんなにも穏やかなのだろう。子供は苦手だつたはずなのに。どうしてヘザーが相手だとこんなにも穏やかな気持ちになれるのだろうか。分かるような気はするけれど、なんだかはつきりしなくて、曖昧な感じだ。

本当に、なんて不思議な人なのだろう。

あたしはもう一口ココアを飲んだ。

「……ガレット、帰つてこないね。遅くなるなら電話してくれればいいのに」

「彼は死んだんだよ。帰つては来ない」

「まだ、信じない」

「氣弱な笑みを浮かべることのない彼の姿を見るまでは、決して、信じない。

「まだ、信じたくないわ」

困つたような笑みを浮かべることのない彼の姿を見るまでは、幻想の中にいたい。まだ、幻想の中に居させて。

もう考えることを放棄したくて、あたしはヘザーの髪を撫でた。なんだようとあたしの手を払い除けようとするその動きは、どことなく小動物じみていて可愛らしい。そういえばガレットは動物に好かれる人だったな、と何となく懐かしくなつて、あたしはもう一度ヘザーの頭を撫で回した。

「エリカ」

「何？」

ヘザーは程よく冷めたココアを一気に飲み干すと、ずい、と空に

なったマグカップをあたしの手に押し付けてきた。

「ココア、お代り」

「……はいはい」

空になつたマグカップを受け取り、あたしはまたキッチンへと向かつた。リトル・レディはヘザーの膝の上から飛び降り、あたしの後を追つて來た。

「 どうして気付かないかなあ」

エリカの後ろ姿にヘザーはぼつりと呟いた。  
自分だけに聞こえるように。

## 2

あたしとヘザーの、奇妙な共同生活が始まった。

別段、何が変わつたというわけではない。ただガレットがヘザーになつたというだけ。それはとても大きな変化のようにも見えるけれど、実際、その生活に大した違いは出て来なかつた。

リトル・レディに尻尾で鼻先をくすぐられて体を起こすと、ヘザーは「お早う」と言って目を細めて笑い、コーヒーを淹れてくれた。湯気の立つコーヒーの芳ばしい香りは、あたしの頭と視界をすつきりと覚醒させてくれる。香り高いこのコーヒーはとっても美味しいのに、ヘザーはあんな苦いものなんか飲めないと黙つてココアを飲んでいた。

……いや、飲もうとしていた、という方が正確だらうか。ヘザーはまだ、ココアにふうふうと息を吹きかけている。そして時折口を付け、すぐにカップを離してまた息を吹きかける。そう言えば、あたしもこのくらいの歳のときはまだコーヒーが飲めなかつた。こういうところは子供らしくて可愛いのに、とあたしは思う。

あたしは一人分の朝食を作り、ヘザーの向かいに座つて頂きますと

手を合わせた。ヘザーは身長が足りないらしく、椅子にクッションを置き、その上にちよこんと正座をしている。メニューはベーコンエッグとトースト、昨日の夜の残りのスープにサラダ。リトル・レディにはキャット・フードと水をあげた。

朝食を終えてシャワーを浴び、キャミソールとボクサーパンツだけというだらしない恰好で室内をうろつくあたしに、ヘザーはなんて恰好してんだ、と少し顔を赤らめてタオルを投げつけてきた。どうやら早く服を着ろということらしい。

そういうえば、こういうことをすると、ガレットも早く服を着ろと顔を真っ赤にしながら喚いていたつ。あたしの裸くらい見慣れているだろうに、彼はそう言つところだけは妙に初々しい反応をするのだ。なんだか懐かしいな。

あたしははいはい、とヘザーに適当な返事をし、柔らかな猫つ毛を撫で回してからジーンズとTシャツを身に着けた。肩に掛かる髪をドライヤーで乾かして、梳しながら手早く首の後ろで一つにまとめる。いつも通りの薄い化粧をし、以前ガレットに買つもらつたビーズ飾りのついたピンで前髪を止めた。このピンはあたしのお気に入りだ。

そして、オーデランジュ・ヴェルトをハンカチに振りかけた。肌が弱くて、直接は付けられないから。

何一つ、変わらない。

ただ、ガレットがヘザーになつただけ。それだけのこと。  
「じゃあ、学校行つてくるね。あ、後、今日はバイトだから帰るの少し遅くなるから」

「ああ、行つてらつしゃい。気を付けてな」

優しい笑みを浮かべ、ヘザーはひらひらと手を振つた。

あたしはちよつとだけ笑つて手を振り返し、スニーカーの靴ひもをきゅっと結び直して外へ出た。空はすつきりと澄んでいて、気持ちがいい。一本の飛行機雲が、すーっと空を分断している。真っ白な線は長く、どこまでも続いていく。

「……あ」

玄関の扉を閉めて鍵を掛けてから、初めて一つの大きな変化に気がついた。

「働き手……」

家賃を折半してくれる人がいなくなつた。

ガレットはもう働いていて、食費などはすべてガレットが出してくれていた。あたしが自分で払っているのは学費と、家賃の三分の一だけ。残つたバイト代は自由に使つていいよとガレットは言つてくれていた。それだけでもかなりの額にはなるが、バイトを二つ掛け持ちしているあたしにとっては、あまり大きな出費にはならなかつた。

だけど、今の状況はちょっと、……いや、かなり苦しい。

食費は少し少くなるだろうけど、食事をする人数は変わらないのだから大した違いではない。今は一家の大黒柱が働きに行けなくなつたのと同じような状態だ。困つたな、とあたしは頭を搔く。少し、バイトを増やしたりした方がいいだろうか。何にせよ、今まで通りとはいかないだろう。

あたしはバスで行くのを止め、自転車に跨つた。

「……この変化は、ちょっと痛いな」

呟いて、勢いよく自転車のペダルを踏み込んだ。

## 『たとえば』の話

0

強きを挫き弱きを助ける？ 馬鹿馬鹿しい。強い者が『悪』で弱い者が『善』だなんて、一体どこに誰が決めたんだ？

1

例えば、満員電車の中の耐え難い香水の臭い。

そんな感じの世界で、俺は生きている。自分でも変な例えだとは思う。だけどきっと、俺にはこれ以上にしつくりとくる表現は見つけられないだろう。一つひとつは良い香りであっても、匂いは強すぎると臭いに変わる。それに四方を囲まれたらと考えて欲しい。移動の為の手段であるそれが、苦痛の小箱となる。

そこは耐え難いけれどあからさまに嫌な顔をすることもできず、面と向かって文句を言うこともできず、ただじつと耐えるしかないといつ苦行しながらの狭い空間。

ここは、そんな世界だ。

「おはよ、ガル。なあ、お前、もうすぐ任務だよな？」

「お早う」

軽い調子で聞いてきた同僚、アスカ・バルザックは俺の顔を覗き込み、わずかに口角を上げた。一言だけそつなく返し、俺は書類の整理を続ける。

「その任務なんだけど、僕も行くことになつたから。お知らせ

「……了解」

アスカは整つた顔立ちの、女顔の男だ。

もうすぐ三十路だというのに女装をして街に行き、声を掛けてきた男をからかって遊ぶのが楽しいのだという、性格と根性と趣味の悪

い奴である。どうでも良いから早く落ち着けと説教したくなる。この男は浮足立つどころかふわふわと浮きっぱなしで、苛々するくらい落ち着きがない。

『このつぶらな瞳にたくさんの方が騙されるんだ。むか苦しい男たちの落胆した顔を見るのはとても快感だよ』などと囁いていたこともあつたか。

一七〇センチに満たない彼は細身で、まるで東洋人のように童顔だ。その所為か、まだ二十歳くらいにも見える。下手をしたら、まだ十代と間違われることすらあるかもしれない。

彼から時折聞かされる、『化粧をしてにっこり微笑んでみたりとかしたら、その辺の女の子なんか田じやないよ』という言葉も、きっと嘘ではないのだろう。幸いなことに、俺はまだその女装姿を見たことはない。不可思議な思考の持ち主ばかりが集まるこの職場に居るアスカが、仕事場に女装で来ないだけの分別を持っていることに俺はひそかに感謝する。男にしてはかなり長い、セミロングの髪を二つに結んでいたり編んでいたりする』とも稀にあるが、それはまあ、許容範囲内だろう。

しかし、何にせよこれが先輩なのだとと思うと若干不愉快になる。敬語を使おうとかそういう思考は、出来つて一週間でなくなつた。ああ、こいつとの任務か。なんだか、厄介者を押し付けられた気分だ。書類の整理を黙々と続ける俺に、アスカは不思議そうに首を傾げた。『そんな雑用なんか自分でやることないじゃん。下つ端にやらせようよ。使える奴くらいいくらでもいるでしょー？』

「俺はこういう事務仕事の方が性に合っているんだ。任務とか、正直行きたくない」

「あははっ、何それ。我らの『アテナ』様がよく言つよ、ギリシャ神話か。

最高神ゼウスの頭から生まれたという、知恵と戦の女神アテナ。そんな勇ましい神に例えられるほど、俺は大層な人間じやない。睨みつけると、アスカは何を思ったのかにこりと笑つて俺の頭に顎を乗

せた。

「『アテナ』様が嫌なら『二ヶ』様でも良いよ？ アテナを勝利に導く有翼の女神様。……ああ、もしかしたらガルには二ヶの方が合っているかもしれないね。サポートとかの方が得意だもんね。でもさ、ガルだってある程度覚悟をしてこっちに移動してきたんでしょう？ そういう文句は胸の内に潜めておかなくっちゃ」

苛々する。この男は俺に何を求めている？ 訳が分からない。一体何を言いたいんだ。どうしてだろう、この男は浮ついている。へらへらと、にやにやと、何かを企んでいるような笑顔が酷く不快だ。「……まだ何か用があるのか？ 書類の整理が終わったら明日の準備をしないといけないんだ。早めに終わらせてくれ。それから、喋るたびに顎が刺さる。そこに頭を乗せている間は口を開くな」「つれないねえ。僕だってちょっとくらい浮いた話題が欲しいんだよ」

俺の頭の上から肩の上に顔を置く場所を変え、アスカはそう言った。「そこらの女にでも声掛けてみろよ。お前くらい綺麗な顔だったら着いてくる女なんかいくらでもいるだろ」

そうだね、とアスカはまるで無垢な少女のように笑つて俺に抱きついてきた。

まったく、これが本当に可愛らしい女性の抱擁ならばどれほどいいだろう。それなら頬にキスのひとつくらい返してやるのに。なのにどうしてこいつなんだ、と俺は少し眉を寄せる。

何が楽しくてやっているのかは分からないが、とにかく不快だ。不愉快だ。失せる、と肩の上の端整な顔に裏拳を入れる。アスカはへびやあつと妙な声を出すと、顔を押えてうずくまつた。

「生憎だが、俺に男色の気はない」

「知ってる。僕だって男なんか願い下げだよ、むさ苦しいし、汗臭いし。……ところで、もう話はしたの？」

「何の？」

アスカの鼻が少し赤くなっていた。若干、目が潤んでいる。この

男は自分も男だということに気付いているのだろうか。すべての男がむさ苦しくて汗臭いといいうのなら、当然その中に自分も含まれているはずなのが。まあ、二二つの事だから自分は特別だと考へているのは聞くまでもないが。

「この仕事の『ト。彼女さんには言つたの?』

まだ鼻の頭をさすりながらアスカは言つた。俺はわずかに目を伏せ、自嘲するように口角を上げた。

「今のところ、俺は警察つてことになつてるよ。……そうだな。死んだら、幽靈にでもなつて自分で伝えに行くさ」

「その冗談、全然面白くなじよ。でも、“警察”かあ。当たらずも遠からずつてカンジだねえ。……でもまあ、警察機関の一つなのは確かだから一応、ウソではない、の、かな。それにしても、ホント律義だよねえ、ガルは。必ずしもウソとは言えないようなウソを吐くんだから。健気だね、彼女には心配かけたくないんだ」

「だから?」

「ガルは優しいねえ。君の彼女は幸せもんだねえ、そんなに愛されて」

僕もそのくらい愛してくれる可愛い恋人が欲しーなー、とアスカは床にへたりと座り込み、ぱたぱたとまるで駄々っ子のように足をばたつかせる。そんな馬鹿なことをやつているつむは絶対に無理だろう、と俺は口には出さず、心中で呟く。

「いつかは話してやりなよ。そういう態度は、場合によつては相手を余計に不安にさせるんだから」

「……守秘義務があるだろ?」まあ、死人には課されないだろうが

「守秘義務? そんなもの、愛の前には無意味だよ。僕だったら彼女にだけは伝えるよ。で、言いふらさなこようについて言つて命めのけど」

要はさ、バレなきやいいんだ。

アスカはそう言つて狡賢そうな目をそつと細めた。

正直にすべてを語るのもどうかと思うけれど。そんなにペラペラ喋つていたら、話さないでいるよりも更に心配させる結果になるんじゃないかな? ……そりやあ、俺だったらいつかは話してやらなければとは思っている。だけど、彼女を汚したくないんだ。彼女は俺の、博愛の花だから。

「彼女にはこんな世界があるなんてこと教えたくないんだ。こんな薄汚れた世界のことなんて、知らないでいて欲しいんだ。ここは、汚れ過ぎているから」

知らなくても良い。知らないでいる方が良いことだつてあるんだ。何も知らないでいる方が、きっと、ずっと気楽に、幸せに生きられる。それだつたら話さないでいる方が、偽りを語り続ける方がいいんじゃないかな?」

「何も語らずに死んじゃつたりしたら、お前、絶対に後悔するよ? ……いや、違うな。お前はそれで良いかもしない。だけど彼女の方はきっと、何も知らずにお前が死んだりしたら悔やんでも悔やみきれないだろうと思うよ」

「縁起でもないことを言つなよ。お前の軽口は何故か本當になるんだから、そういうことを口走るのは止めてくれ」

お前が言つと、本當になりそうで怖いんだ。

「そんなの、ここは職場じゃ別に珍しいことでもないでしょ? 今月だつて、もう一人殉職してるじゃん」

そういうえば、その片方はアスカに『死にそうな顔してるね』などとからかわれていたつ。ああ全く、本当に縁起でもない。この仕事は生と死の狭間にあるのだ。いつでも、真っ黒な死神がうろついている。

「いい加減、彼女さんの事信じてあげなよ。ここにうつことは、大切な人にこそ話してあげるべきだよ」

信じているさ。彼女がどんな人より気丈なことも知つてゐる。だけど、怖いんだ。

「それに、嘘つていうのはいつかはバレるもんだよ。絶対にね」

正直に言つて失望されたらどうする。

あいつの幻想を壊してしまつたらどうする。

あいつが滅多なことじや泣かないということくらい俺だつて知つて  
いるわ。だけど、もし泣かれたら？ 真実を語つて、もし泣かれて  
しまつたら。そしたら、俺は一体どうしたら良いんだ？

俺はあいつの泣き顔なんか見たくない。俺は常に、"正義の味方"  
でいなければいけないんだ。例え彼女が、俺の過去を知つていたと  
しても。彼女はいつも、過去ではなく今を見ている。だから俺は、  
彼女を心配させちゃいけないんだ。

「じゃあね、お説教はこのくらいにしておく。後でコーヒー奢つて  
やるよ」

俺の思考を読み取つたみたいに、ぽんぽんと俺の肩を叩き、慰め  
るような声でアスカはそう言つた。俺がコーヒーを飲めないことを  
知つてゐるクセに。

「おい」

「ん？ なあに？」

細身の背に投げた言葉に、アスカはにつと笑つて振り返つた。

「コーヒーなんてあんな苦いもん飲めるか。奢つてもうつなら」

アだ

「いーよ。甘いココアにお砂糖とクリームもたーつふり追加して  
やるよ。ちゃんと全部飲めよー？」

きつと飽和状態を通り過ぎたじりじりしたココアを飲まされ  
るんだろうな。

吹き出してしまいそうなほど甘い、まるで罰ゲームのようなココア。  
あの人はそういう訳の分からないとこりでよく分からぬ嫌がらせ  
をしてくるから。

『 ガレット・コールマン、ガレット・コールマン。至急、会議  
室まで来て下さい。繰り返します。ガレット・コールマン、ガレッ  
ト……』

社内放送だ。

ああ、行かない。

2

例えば、田覚めたとたんに薄れてゆく夢の記憶。  
それは現実なのか、それとも夢なのか。本当なのか、それとも嘘  
なのか。

あたしは時折、『今』が本物なのか偽物なのか分からなくなる。フ  
イクシヨンの中に居るような気がしてくる。

毎日が酷く曖昧で、今にも田覚めてしまいそう。  
よく、今あたしは眠りの中に居て、夢を見ているんぢやないかって  
思つことがある。夢と現実、本当と嘘との区別がつけられないなん  
て、あたしはきっと狂つてしているのに違いない。

「彼氏が欲しい」

学校の友人、サラは食堂のテーブルに突つ伏して、寂しいとこぼ  
した。最近、彼氏と別れて、というか一方的に別れ話を持ち出され  
たとかで、辛いらしく。サラは外見と中身のギャップが激しすぎる  
のだ。だからいつも、着いて行けない、だと、そんな子だとは思  
わなかつた、などと言われて振られてしまうのだと。

あたしはよしよしとサラの頭を撫で、チョコレートを一つ渡した。  
ゆるくウエーブを描く長い金髪が田に透けて、きらきらと光つてい  
る。綺麗な子だな、と毎日顔を合わせるたびに想つ。初めて会つた  
ときは本当に天使みたいな子だと思った。

いつもお菓子を入れているポーチを見るとミルクチョコレートがも  
うほとんどなくなつていた。買い足しておかないと。

「……チョコだあ」

「チョコだよ。幸せのもと」

サラは金色の包み紙を剥がし、ポンと口の中に放り込む。そして  
甘いなあ、と呟いた。甘い甘いチョコレート。あたしはそれを、幸  
せの味だと思つ。チョコレートはまるで、依存性の強い麻薬のよう

だ。

「美味しい？」

「うん」

あたしも一つ、チョコレートを口に含んだ。深い甘さが口の中に広がる。チョコレートの甘さはやつぱり後を引く。

「彼氏欲しいの？」

「うん」

「ならいつそのこと女の子らしく化けていれば良いのに」

「それが出来れば苦労しない。だけど、残念なことに私はとつても不器用なの。そんな自分を偽るようなことなんか出来やしないもの。でも、エリイがなつてくれるなら彼氏なんかいらないわ」

「あたし女だけど」

「残念。そこらの男なんかよりずっと男前なのに」

サラは顔に流れてきた長い前髪を搔き上げると、あたしを見つめて左右に首を振った。そして、もつたいない、と溜め息をついた。「オリエンタルな長い黒髪は絹糸みたいにさらさらだし、黒目がちな大きな瞳も黒曜石みたいで綺麗だわ。すっと通った鼻筋も長い睫毛もすごく素敵。ハスキーな声はカッコいいし、それに頭も良い。運動神経も良いし。ほら、この間なんかフェンシングの大会で入賞してたじゃない。あんたが男だったら私、絶対に惚れていたわ。ああもう、なんでエリイは男に生まれなかつたのかしら。女に生れて来てしまつたのかしら。神様つて残酷よね、もう残念でならないわ」まるで決まった台詞をいうみたいにほとんど息継ぎなしで一気に言い終えると、サラは一度深呼吸をしてまた机に突つ伏した。

「そういう台詞は本当に残念そうに言わないで欲しいわ」

サラはせばせばとした性格で社交辞令的なことは滅多に口にしないから、その言葉に偽りはないと分かる。それが凄く嬉しい。

幼いころ、自分では黒くて悪魔みたいだと思っていたこの外見を、サラは羨ましいといつ。ぞつくりと紡がれるサラの言葉は、とつてもストレート。嫌なことは嫌、良いことは良い。それが気に入らな

いという人もいるけれど、その内容は理にかなつた事ばかりだから、すんなりと受け入れられる。過剰な褒め言葉には、なんだか照れてしまうけれど。

「それにあたし、彼氏いるんだけど」

「知つてゐるわ、ミス・カフラ。何度となく聞かされているもの。年上の、警察官のとつてもかつこいい彼氏さんでしよう？」

唇を尖らせて、気にくわないとでも言つように頬杖を突くと、サラはもう嫌つてほど聞かされたわ、と呟いた。『ミス・カフラ』だなんて、あたしがそう呼ばれるのを嫌つているつて知つている癖に。だつてそんな呼び方じや、まるで氣難しい先生みたいじやない。だつたら『エリカ・カフラ』つてフルネームで呼ばれる方がまだマシだわ。

「瞳が綺麗で、格好良くて、優しくて、料理が壊滅的に下手で、だけど飲めないコーヒーを淹れるのだけはすごく上手で、とんでもないくらい甘党で、笑顔の素敵な彼氏さんでしょ？」

そんなにガレットの事ばかり話していたかしら、と首を傾げると、サラはわざとらしく、いかにも不機嫌そうに唇を尖らしてはあーと深く溜め息を吐いた。自分で気が付いていなかつたの、とでも言つよう眉を寄せる。

「こつちは毎日ノロケばかりでぐつたりしてるつていうの」あんまり話しているとは思つてはいなかつたのだけど、そんなに呆れられるほど話していたのか。無意識つて怖いな。なんだか恥ずかしくなつて、あたしはサラにもう一つチョコレートを渡した。何故か、あーと口を開いて待機するので包み紙を剥がしてサラの口に放り込むと、カカオ七十パーセントのそれにサラは苦あ、と呻いた。

「……エリイー」

「『めんね。ミルクチョコレートは、さつきあたしが食べたやつで全部なくなっちゃつたの』

あとは興味本位で買ったカカオ七十パーセントとカカオ九十パーセントのチョコレートしかない。あたしはどちらも一欠けだけ食べて、

そのチョコレー<sup>ト</sup>とは思えないほど<sup>の</sup>強烈な苦<sup>セリ</sup>で、それ以上食べることができなくなつた。

だけど七十パーセントの方を渡しただけまだ良心的だと思つてほしい。そつちの方がまだ、ほんのりと甘さを保つていてるから。残りのチョコレー<sup>ト</sup>、どうやって消費しようかな。捨てるのはもつたいいなし、次は誰に食べさせよう。……サラにはもう渡せないなあ。ばれちゃつたから。

「ねえ、エリイ。そのガレットさんといつぞい<sup>イ</sup>であったの?」

「何? 警察官の彼氏でもつくりたいの?」

「ま、あわよくばと思つてね」

綺麗に整つた顔に悪戯っぽい表情を浮かべてサラは笑つた。こつこつときのサラはすごく幼い表情をする。でも魅惑的で、子供っぽくに<sup>つ</sup>と歯を見せるその笑顔はどこか官能的にすら見える。無意識に、無邪気に誘う。彼女はなんて無垢な悪魔なのだろう。まるで真白な、桜の花のようだ。

「……サラは、まるで桜の花みたいね」

言つて、少しほぐらかす。あんな出会いは、きっとなかなかないだろうから。

「桜? あんなに儂<sup>の</sup>い花が、私? これでも団太く生きているのよ。こんな見た目だから、か弱そ<sup>うそ</sup>とはよく言われるけど」

金色の髪を一房摘まんで、サラは肩を竦めた。

「儂<sup>の</sup>いなんてないわ」

食堂の一角。誰が話を聞いていてもおかしくない。みんな、きつと驚くだろう。サラをこんな風に評する人なんていないだろうから。「あれは散る姿ですら人を魅了する、魔性の花よ。その証拠に、桜の幹はとても力強く根付いているじゃない。儂<sup>の</sup>さのかけらもない、力強い幹が。あの木は儂<sup>の</sup>いふりをしているだけなのよ

「そうかしら? 私には、儂<sup>の</sup>い雪のよつな花にしか見えないわ

「そう? それじゃあ、花に喰えるのは止めようかしら。……そうね。桜でないのならサラはシンデレラね。謀が大好きなお姫さま。

悲劇のヒロインを演じながら、どこかにチャンスはないかって鷹みたいに目を光らせている。王子の気を引くのも、意地悪な継母やお姉さんたちに一泡吹かせるのも、すべて計画していたことなんじやないかしら」「魔法使いのおばあさんがいないとシンデレラはお城へは行けなかつたのよ?」

「魔法使いのおばあさんがいないとシンデレラは上目使いにあたしをちらりと見る。」

「だけど、魔法使いなんかいなくとも自力で何とかしていたと思うわ。魔法使いの出現は、計画を早めるきっかけになつただけ。継母たちが出掛けてしまえばその後で家を出ることくらい簡単だし、家にはお姉さんたちのドレスが山ほどあるのよ。しかも全部、シンデレラが管理してるんだもの、どうにでもなるわよ。」

「確かに、王子が自分に惚れるかどうかは賭けだつたかもしだい。でも、少し気を引くことさえできれば、何とかしたと思つわ」「どうやって?」

「片足だけハイヒールを履いて走るなんて、普通は出来ないでしょ? 少なくともあたしには無理。きっとこれも計画の一つだつたのよ。もう帰らないと、なんて焦らしながら、一つだけ手掛かりを用意しておくる。王子はまんまとそれに引っ掛けつて、シンデレラに捕まつたの。すべては、シンデレラによつて謀られていたのよ」

言つて、あたしは笑つた。一見清らかに咲く花こそ官能的、清らかに語られる童話ほど謀られているものだわ、と。サラは綺麗な金髪を長くしなやかな指で搔き上げて、変なのと呴いた。

「あたし、そんなに変なこと言つたかしら?」

「少なくとも私の『普通』の基準からはずれてはいるわ、ファニー。」

「あなたは将来小説家になるべきね」

「ちゃんと、とあたしの鼻をつづいてくる細い指先を払い除け、唇を尖らせてみせる。」

「あたしは『ファニー』なんてふざけた名前じゃないわ」

「分かつて使つているの」

意地悪そうに笑つて、サラばそつ語つた。

「あたしは思つたことをそのまま言つただけなんだけど」

「知つてゐる。エリイは思つてもいなことを口にするよつなナジゅ  
ないわ。そんなに器用じやないつてことも私は知つてゐる。エリイは  
思つたことをそのまま言つか黙つてゐるかのどつちかだもんね。

それじゃあ、エリイは何の花なの？」

あたしはその間に、わずかに笑んだ。

「あたしは、『博愛の花』なんだつて」

君は、俺の博愛の花なんだ。

3

「エリカは、必要悪つてあると語つ？」

最近、ガレットは仕事から帰るとそんな話ばかりする。

そのどこか哲学的な問ひに、あたしはわずかに眉をひそめた。ガレ  
ットがこいついう問ひかけをしてくるとき、それは何かで悩んでいる  
ときだ。いつも何の脈絡もなくいきなり話しだすから、周りの人間  
にはその質問の意図が分からぬことが多いけれど、それでもガレ  
ットの中では必ずどこかで関係性がある。

それにしても、こいついう時の眠たげな、疲れたような瞳は心を病ん  
だ子供のようで、見つめているとこつちまで不安になつてくる。  
必要悪？ と聞き返すあたしに、ガレットはそう、と頷いた。

……必要悪。

やむを得ず必要とされる悪、か。

うーん、とあたしは唸る。考へてゐる」とはその問ひについてでは  
なく、今の彼の精神状態について。

あたしはガレットを見つめた。

いつもと同じように静かで穏やかな表情だけど、なんだか憂えたよ

うな、悲しげな目をしているように見える。あたし達が出会ったときとは明らかに違う。あの時の彼は本当に、自分を表へ出すことを拒否していたから。

悲しいのかそうでないのか分からぬくらい、卑怯にも思えるくらい、彼はそのどちらでもないよう振る舞うのがとても上手だった。彼がここまで気持ちを素直に見せてくれるようになつたことに、あたしは少し感謝する。

ガレットはいつも悲しいとか辛いとか、マイナスの感情を人に見せないよう、表に出さないように生きているから。

知り合つて間もない人だったら、この違いには絶対に気付かないだろう。いや、比較的親しい人だとしてもこの変化はなかなか分からぬかもしれない。普段と今の違いも、ほんのわずかな物でしかないのだから。あたしも、最近になつてようやく分かるようになつてきたところだ。いつも同じように笑っているから、人には感情が読めないとか掴みどころがないとか言われているみたい。

あたしは少し悩み、ガレットの問いに答える。

……必要悪の、有無。

「……あるんじゃないかな。例えばそうね、死刑執行人、とか」  
正義の為に、人を殺める。

これは多分、必要悪だ。あたしの出した答えに、ガレットは力なく微笑み、左右に首を振つた。

「その『悪』は、本当に必要なものなのかな」  
ガレットはあたしの髪を撫で、ぽつりと言つた。

殺人はどんな者がどんな理由で行おうと犯罪だ、と。それはいつの時代にも変わらずにある、不变の決まり事だ、と。  
「これは飽くまでも俺の持論なのだけど……。

死刑執行人は法的に殺人を許されてはいるけれど、それでも、俺は何よりも重い犯罪だと思うんだ。犯罪を合法化するために“正義の為”っていう仮面をつけてるだけ。人間が、自分の中にあるルールを世界に適用させてしまつただけ。こういう場合くらい許され

ても良いよね、このくらいの妥協なら許されるよね、ってさ。……法的に殺人が許容されているんだ。恐ろしい世の中だよね

悲しげにつぶやく姿。

「人を殺すことに必要性なんかこれっぽっちもないんだ。……ただ、自分が安心したいだけなんだから。死ぬことで償えるものなんか何一つ有りはない」

「……必要悪は、本当は必要のないものだといつこと？」

「命のやり取りをする物に関しては、そう思うよ」

ソファーの背もたれに倒れるように寄り掛かると、ガレットは静かに息を漏らした。その疲れ切ったような深い溜息に、耳を塞ぎたくなる。けれど何かあつたの、なんて核心を突くようなことは絶対に聞かない。聞いた途端に、ガレットは何もしゃべらなくなる。心配かけて「ごめんね、なんて言つて急に黙り込んでしまう。

彼は悩みを、自分の中に押し込めてしまう。

それだけは、なんとしてでも止めさせないといけない。そうしないと、彼はきっと壊れてしまうから。

「ねえ、エリカ。ココアが飲みたいな。物凄く、甘い奴を」  
ガレットは笑つた。

今にも泣き出しそうな表情で、穏やかに、壊れてしまいそうな笑みを浮かべた。

俺だつてその法律に守られているのにね、と。

0

彼女は言った。祈りの場に軍人の姿は不似合いだ、と。

1

俺達の出会い。

それは運命的なものでも感動的なものでも何でもなくて、けれどありきたりでも退屈でもないもので、どこか、刹那的なものだつた。……きっともう訪れる事のない、最初で最後の出会いになるのだろう、そういう刹那的なものなのだろうと、その時の俺はそう思つていた。

八月。

じめじめと、重たく湿つた空気が不快指数を高めている。気温はこれでもかと三十五度を超え、湿度もそれに負けないくらいの高さを誇つている。こんな日に、俺は彼女と出会つた。

「君、何をしているの

町はずれの、ほとんど廃墟と化した教会。

まるで聖フランチエスコが立て直そうとした教会　　たしか聖ダミアノ教会といったか　　のような、外壁の崩れかけたとても古い建物。けれど、中だけはやけに綺麗に整つていて、日常的に誰かが掃除をしていることは明らかだつた。どこかのもの好きか、はたまた神の声を聞いた預言者か。

その教会から少し離れたところで、彼女はひつそりと佇んでいた。

「……お祈りに来たのだけど、今日は入れなさそうね」

ノースリーブの丈の長い白いワンピースから、今まで日に当たつたことなどないのではないかと思うほど、真っ白で細い腕が炎天の下

に惜しげもなく晒されていた。不思議なくらい汗一つかいていない涼しげな真っ白な肌に、真っすぐで艶やかな黒い髪。瑞々しいさくらんぼのように赤く色づいた唇。

……ああ、白雪姫とは彼女のことだったのか。

“凛とした美しさ”というものを、俺は初めて目にした。その気高さに、しばしの間見惚れてしまった。

「……ねえ？」

「……え？ あ。ああ、そうだね。これからしばらばは中に入れなくなるね。君、ここにはよく来るの？」

「ええ、最近は毎日来ているわ。ここに来てお掃除をして、お祈りして帰るのが日課なの。今までは週末だけだったんだけど、今は夏休みだから」

預言者ではなく、モノ好きなお姫様。彼女はそう言いながら、チヨコレートをほんと口に含んだ。甘い香りがふわと漂う。金色の包みのそれを俺に無言のまま一つ差し出すが、やんわりと首を振つて断つた。

「随分と信心深いんだね。……丁度良い。それじゃあ、昨日ここで不審な人物とかは見なかつたかい？ ちょっと、厄介な事件が起きていてね。今、目撃者を捜しているところなんだ」

この教会の中で、殺人事件が起きた。捜査の結果、マフィア同士の抗争に一般人が巻き込まれたのだということが分かつた。殺された男は、一体何を見たのだろうか。どうせろくでもないことなのだろうが、気になる。何の為にここに来たのか、何を見て殺されたのか。

黒で“KEEP OUT”と書かれた黄色のテープに手を掛けると、その女性はわずかに目を細めた。ふんわりと、長い黒髪が風に揺らぐ。

「教会で事件だなんて、背徳的なんだか素敵ね」

「こんなことを言つたら不謹慎かしら。そう言つてくすりと笑つてから、彼女は俺の問いに答えた。

「怪しい人は見なかつたわ。……良ければ、何の事件なのか知りたいんだけど。もしかして殺人？」ここ、かすかに血の臭いがするわ」

抑揚のない平坦なしゃべり方。可愛げはないけれど、落ち着いた静かな口調には好感が持てる。女性らしい見た目に反し、少し低めのハスキーな声。彼女の声は、聞いていて心地良い。

「ごめんね、一般人に話す訳にはいかないんだ。今日明日中にニュースになるはずだから、それを見てくれる？」

「分かつた。それじゃあ、今日は帰るわ。血の臭いのする場所でお祈りなんかしたくないもの」

「大通りに出て五分くらい歩いた所にも教会があつたはずだよ。最近出来たばかりの、立派なやつが」

「そんなところに神様がいるとでも？」

そつけなく言って、彼女は俺に背を向けた。

……ああ、なんて美しい。

まるで人に懐かない猫のようだと思った。

すべてを拒絶して歩く、勇猛で果敢で、弱さを見せまいとして虚勢を張っている猫のようだ。とても綺麗な、真っ黒な猫。そう思いながら、俺は彼女の後姿を見つめていた。

きっともう、彼女に出会うことはないだろう、と。

予想に反し、次の日も、また次の日も、彼女は教会に来た。そして彼女はまだ入れないのかと俺に問い合わせ、帰つていく。不思議な人だ。何度も何度も捜査中の教会を訪れ、俺と一分一分ほどの会話をし、帰つていく。名前も何も知らない、一人の女性。本当に、不思議な人だ。

「今日も入れないの？」

「今日も、入れないよ」

相変わらず、"KEEP OUT"のテープが境界を作つていた。ここから先には入るなと、無言のまま周囲を威嚇している。警

戒色のそれを退屈そうに見やつて、彼女はふうと息を吐く。

「ここは祈りの場なのに、まるで汚されたようだわ。こんなにも、警察だけになっちゃうなんて。……ほんと、不似合い」

ピンと細い指先でテープを弾き、目を伏せて呟く彼女は気高く美しい。

「そう言えば君、前に言つていたよね。近くに立派な教会があるよつて教えた時に、『そんなところに神様がいるとでも？』つて。あれ、どういう意味なの？」

彼女は別に、と呟く。そしてかすかに笑つた。自嘲したような、自分に呆れかえつているような笑い。

「……別に。ただ、新しい教会はあたしには、馴染みづらいってだけ。ああいう立派な所つて警備の人がいっぱいいるでしょ？ 祈りの為の場所なのに。」

もうすでに神様の庇護の中にいるというのに誰かに守つてもらわないと祈ることもできないなんて、そんなの可笑しいわ。馬鹿げてる。『ここには神様なんていませんよ』って公言しているようなものじやない。それに、祈りの場に軍人の姿は似合わないもの」

そうでしょ？ と唇を尖らせて彼女は俺に同意を求める。口角を上げてかすかに頷いて見せると、彼女は少し嬉しそうな表情をしてさらに言葉を紡いだ。

「それに妙にキラキラしていて、形だけつて感じがするし、誰に祈りを捧げているのかが分からなくなるし。の中に入ると、崇める対象がたくさんいるんだもの。」

あの教会がカトリックなのかプロテスタントのかは知らないけど、尊い人が多すぎるわ。神に、キリストに、聖靈に天使に聖人たち。三位一体だか何だか知らないけど、ややこしくてわけが分からなくなる。その点、誰もいないこういう廃れたような教会だつたら自分の信じるものに対して真つ直ぐに、素直に向き合えるわ

「面白いね。そんな考え方、初めて聞いたよ」

あはは、と笑い声を洩らす俺に、彼女は何がおかしいの？ と首

を傾げた。あたしは思つたことをそのまま言つただけなのだけれど。

「可笑しくなんかないよ。新しい考え方だな、とは思つけれど」

そう言つた俺に、彼女はどこか楽しげに口を開いた。

「それに、こういう教会の方が何か居そうじやない。神様か、妖精か、幽霊か、……もしくは、逃走中の指名手配犯か。まあ、それが何なのかは分からぬけどね」

言つて、彼女は踊るようにくるりと回つて俺に背を向けた。

「もし本当に指名手配犯が潜んでいたらどうする?」

彼女の背中に、冗談半分の質問を投げかける。彼女は振り返り、一言、お友達になるわと答えた。指名手配犯とお友達になる、か。なんて愉快な発想だらう。俺には到底思いつかない答えた。

「じゃあね。明日、また来るわ。その時までに捜査が終わっていることを祈つて」

彼女は、とても敬謙な信者だった。

“何か”を、心の底から深く信じていた。

彼女が何を信じていたのかは分からぬ。ただ、彼女は普通の人の思考から少しばみ出したところにあるような考えをする人だから、その“何か”を明らかにするのは酷く難しいことなのかもしれない。

「君、名前は?」

その“何か”が知りたくて、俺は再び背を向けた彼女に名前を聞いた。彼女は「エリカ」と一言だけ呟いて、振り返ることなく歩を進めた。

……エリカ。

ああ、孤独の花の名だ。

裏切りの花だ。

エリカ。

博愛の花。

宣言したとおり、エリカはまた次の日も教会に来た。その時にはもう捜査はすっかり終わっていて、事件を起こしたのはどこのマフィアなのかも特定でき、そのうちの誰が男を殺したのかも分かっていた。

後は、その犯人からどうやってマフィア全体を終わらすのかが問題だ。芋づる式に全てを捕らえる事が出来れば良いのだが。ああ、またキツイ仕事が始まりそうだ。

「こんにちは」

「やあ、こんにちは」

右手を上げて、彼女に答える。本当は来なくても良い廃れた教会に、また俺は脚を運んでいた。推理小説の中の名探偵よろしく、何か新しい事実を見つけ出したわけではない。ただ、エリカに会っためだけにここに来た。“KEEP OUT”的テープは取り払われ、初めて区切りのない状態で言葉を交わした。

空には、見事な入道雲がぱかりと浮かんでいる。

「君は、学生?」

「大学一年。今は夏休み」

現役ならば十八歳か十九歳か。参ったな、五つも下だ。

「今日は中に入つても良いの?」

「良いよ。血の香りのする、人の死んだ場所で良ければね」

実際は、血の香りなんか疾の昔に消えてしまっているけれど。

「人が死んだのならなおさら、祈りを捧げなくっちゃいけないわ」

エリカはにつこりと華やかに笑つて、俺の横を通りて教会の中へと進んでいった。ピンヒールが石畳を叩くたびに、コツコツと乾いた音がした。もともと背の高い彼女は、そのピンヒールの所為でそこの男よりもずっと身長が高くなっている。しかし、十センチ近いそのピンヒールを脱いだとしても、おそらく一七〇センチ以上あるだろう。長身で、すらりと綺麗に伸びた背筋に自然と目が行く。その姿はとても清らかで、そのうち真っ白な羽根でも生えてくる

んじやないかと思った。彼女は、本当は神の御使い……天使なのではないだろうか、と。

「……死んでから数日経つのに花を手向けに来る人もいない、祈りに来る人もいない。これじゃあ、どんな人でも浮かばれないわ」

寂れた教会に舞い降りた麗しき天使。

俺はエリカの後を追い、教会の中に入つた。仕事抜きで見る教会は、輝いていた。外観からは想像もつかないほど中は綺麗に整い、塵ひとつない。磨かれたステンドグラスは、日の光を浴びて眩しいくらいにきらめいている。一列に並んだ長椅子の隅に、一人の老人が座つていた。

痩せこけた頬、中途半端に伸びた髭、小汚い服装、漂う悪臭。嫌悪を感じるほどのその身なりは、貧相な老人の姿を余計に卑しく見せていた。美しいこの教会とは酷く不似合いだ。エリカは迷うことなくその老人のもとへ行き、こんにちは、と微笑んだ。

そしてその隣に座り、久しぶりねと親しげに言葉を交わす。

「エリカ、彼は？」

老人は警戒心の強い目で俺を見ながらエリカに問うた。

「警察の人。そこで会つたのよ」

「そうか、と老人は呟く。そして訝しそうに俺をちらと見た。疲れ切つたようなその表情は、どこか悲しげに歪んでいた。

「……この人はこここの住人さん。長いこと、ここで暮らしているの。名前は知らないけれど、あたしのお友達よ」

手短にその老人を紹介し、エリカは俺に隣に座るよう促した。無言のまま、ぽんぽんと自分の隣の位置を軽く叩く。

「……エリカ、怪しい人はいなかつたって言つていたよね？」

「顔見知りのおじさまが怪しい人の訳ないじゃない」

さらりと言つて、ねえ、と老人に同意を求めた。

「ただ住む場所がないというだけで『怪しい人物』扱いか……。そりやあ、追いかけ回されもするわな。全く、それじゃあこの世界中、怪しい人物だらけだな」

「警察に追いかけ回されたの？ おじさま、大丈夫だったの？」

「ああ。『任意同行願います』だとさ。嫌だと書いて逃げたら捕まつてしまつたよ。任意だと言つたのは向こうなのに。そしてさんざ詰問されて、一日間は獄中で犯人扱いだ。本物の犯人が捕まつたら『悪かつたな』の一言で終わり。しかもあいつら、『もつ怪しまれるようなことはするなよ』とまで言つてきた」

「ひどいわね。ねえ」

今度は俺に同意を求める。切れ長の黒い瞳が、非難がましく俺を見つめてくる。俺がしたわけではないし、そんなことはしたこともないのだが。

しかし、警察の実態など所詮そんなものだ。正義を盾に全ての事を疑つてかかる職業。その中では、調べつくしてから善と悪とが決まるのだ。調べてから、その人が白なのか黒なのかが決まる。調べる前にそこにあるのは、限りなく黒に近いグレーだけ。可能性のあるものは皆、犯人と同じように扱われる。

「……はははっ！」

「な、なんだお前！ なぜ笑う！」

老人は立ち上がり、俺を睨みつけてくる。今にも殴りかかってきたその勢いに、俺はまた笑いそうになつた。涙を拭い、老人に向きなおる。

「あははっ、悪いな。つい。俺も元被害者なんだ、気持ちは分かるよ。昔は随分とやんちゃしたからさ。その所為で何もしてなくとも犯人扱いだ。だから、俺は警察になつた。もう疑われることのないようにな。警察なんて大体はそんなもんだよ。身内の事はすぐに信じる癖に他は全部疑つてかかる」

くすくすと笑いながら、話を続ける。

「ついこの間まで疑つていたガキでも、身内になつたらもう疑つたりはしなくなるしね。ちょっと更正したふりをしたら、信頼関係くらいすぐに生まれる。とても一方的なものだけね。紛い物の信頼なんて、簡単もんだよ。」

それにね、『任意』なんて言つていてもそこには任意性なんてまるでない。彼等は自分の一言に絶対的な力があると思ってる。来いと言えば、誰もが付いてくると思ってるんだ。白か黒かが決まるまで、警察が相手にするのは『犯人』だけだからね

警察の実態を蔑む台詞。これはつまり、自分自身を蔑む台詞でもある。

その醜悪な言葉の羅列に老人はぽかんと口を開くと、はつと息を吐き出すようにかすかに笑つた。警察を侮蔑しきつたさつきまでの態度とは明らかに違う、穏やかな、けれどどこか悪戯っぽい表情。

「最近のガキは心にもない謝罪の言葉を述べてねちねちと言い訳を重ねるような奴等ばかりだと思ってたが、お前のような潔い男はなかなか好ましいな。そこまで言い切つてしまつといつそ清々しいぞ」

「良かつたわね、おじさまに認めてもらえる人つてなかなかいないのよ」

「有難う」

にこりと笑つて礼を返すと、エリカは唐突に俺の襟首を掴み、唇を重ねてきた。唐突に与えられた柔らかな感触に驚いて身を引くと、エリカはからかうように笑つた。

「目、見開いている。そんなに驚いたの？」

「……何？」

「あなたの事、気に入つたわ」「気に入つたつて……」

俺の言葉など聞こえなかつたようにエリカは続ける。

「そう言えば聞いてなかつたわね、あなたの名前。なんていうの？」

「……ガレット。ガレット・コールマン」

「ガレット、ね」

そう言つて浮かべた鮮やかな笑みは、俺の脳裏に深く焼きついた。ハマつてしまつたかな、と思つ。

まさか五つも下の女の子にここまで主導権を握られるとは、思つて

もみなかつた。慣れないけれど、嫌な感じはしない。このままする  
すると彼女のペースに流され、引きずられてみるのも良いかもしれ  
ない。

自由奔放なエリカの流れに身を任せて生きてみるのも、また一興。  
エリカとなら、きっと心地良く楽しめるだろつ。

「今日はもう帰るわ」

「……エリカ？」

俺の頬に唇を寄せ、エリカは呟いた。また明日ね、と。  
俺はその後ろ姿に見惚れていた。

すらりと真っ直ぐに伸びた後ろ姿は何よりも綺麗で清らかで、その  
背中に白い羽根がないことに違和感すら覚えてしまうほどで、やつ  
ぱり彼女は本物の天使だったのかもしれない、俺はぼんやりと考  
えていた。

「美しいだろ？？」

老人は穏やかに言った。  
「彼女はね、天使なんだ」

よく思う。現実を直視することほど怖いものはない、と。

1

バイトから帰り玄関を開けると、いつも通りリトル・レディが出迎えをしてくれた。猫なのにまるで懐っこい犬みたい。早く構つてちょうどだい、とでも言つように、あたしの足にすり寄つてくる。ちょっと待つてね、と軽く頭を撫でて部屋に入つた。

「……？」

ダイニングテーブルの上に、ぽんと無造作に置かれた三冊の通帳と、四ケタの数字が書かれたメモ。

……この数字は、暗証番号だろうか。どれも見覚えのないものなのに、その通帳の三冊ともがあたし名義になつていて。開いてみて、愕然とした。

「これって……」

残高は、九桁。

合わせて、ではない。その三冊のどれにも、億単位の大金が入つている。

どういうことなの、とあたしは頭を搔いた。ふと見ると、ヘザーは気持ち良さそうにソファーの上で寝息を立てていた。二人掛け用の小振りなソファーは小柄なヘザーには横になるのに丁度良いサイズらしく、ぴったりと収まっている。呼吸の度、胸がわずかに上下する。

ああ、とにかく聞かなきや。

「ヘザー、ヘザー！」

「……なんだよ、うるさいなあつ」

彼つっていたタオルケツトを剥がしてヘザーを叩き起して通帳を見せるど、ヘザーはううー、と唸り声を出した。まだ眠たいのだろう、欠伸をして、薄く涙のこじむ田をじこじこと擦る。髪には寝癖がついて、ぴょこぴょこと無造作にはねている。

「これ、テーブルの上に置いてあつたの。どういうことなの？ ガレットが帰つて来たの？ お願い、正直にこたえて。ねえ、これ、何なのよ」

寝起きで、まだ視界がぼやけているのだろう。ヘザーはわずかに目を細めて通帳に顔を近づける。そして寝ぼけ眼を擦りながらああ、と呟いた。

「遺産だよ」

「え？」

足もとをうねうねと歩き回るリトル・レディを抱き上げ、ヘザーは続ける。

「だから、遺産だつてば。ガレットの。よかつたじやん、もともとエリカ名義だからなんの手続きもいらないね。相続税とかもかかんないだろ？ ま、もともとガレットに家族はもういないんだし、どっちにしてもエリカの物になつていたんだろうけどさ。探したらそこら辺に遺書かなんかもあるんじゃない？」

「それどういうことよ！」

ふああ、とヘザーはあたしの言葉を無視して大きな欠伸をし、涙を拭う。

「まだ眠いから、寝るよ。じゃーね、お休み～」

そう言つて剥がされたタオルケツトを被り直したヘザーに呆然として、あたしはあんぐりと口を開いた。その後すぐに穏やかな寝息が聞こえてきて、どうすればいいのよ、とあたしはヘザーの寝顔を眺めて言つた。

「……遺書」

「遺書なんか、ないわ。

あたしは三冊の通帳を閉じ、呟いた。

遺書なんかない。

遺書なんか……ある訳がないじゃないの。

だつて彼は、死んでなどいないのだから。

・

取り敢えずは、金銭の問題は解決したと言つても良いだろう。一晩どうするか考えて、あたしはガレットの用意してくれていた通帳を机の引き出しにしまつた。そして自分の通帳を出してその残高を見た。あまり購買欲がないから、それなりに貯まつてはいる。だけど、これからはそうはいかない。生活をするにあたつて、最低限必要なものがいくつもあるのだ。

家賃、学費、食費、ガス代、水道代。風邪を引けば薬を買うだろうし、酷くなれば病院にだつて行く。季節が変われば少しは服も買うだろう。それに洗剤とかシャンプーとかの消耗品は必ず定期的に買わなくてはいけないものだ。

あたしは自分の通帳の残高を見て、溜め息をついた。

いくら貯まつているとはいえ、学生の通帳の中身などたかが知れている。それなりに、以上の金額には到底ならない。出費を少し多目に見積もつたら、精々三か月くらいしか持たないだろう。良くても、四ヶ月くらいが限度。

出来るだけガレットの通帳には手を出したくはないから、バイトは続ける。同時進行で、もう少し時給の高い所を探す。…それとも、どこか掛け持ちが出来るところを探した方がいいだろうか。あと、食費などは少し切り詰める。バスで学校に行くのはやめて、自転車で行く。

そうすればもう少し……半年くらいは持つだろうか。

「ふうん、引っ越しとかは考えないんだ。ここより家賃の安い所なんて、いくらでもあると思うけど」

翌日、ヘザーに話をしたらそう返つて来た。

ねこじゅうじでリトル・レディと遊びながら言つへザーの頬を、生意気、とむにむに突く。爪は昨日のうちにちゃんと切つておいたから、大して痛くはないはずだ。ヘザーは止めてくれとでも言いたそうにつんと唇を尖らせたが、抵抗することはなく、されるがままになつてゐる。

確かに、ここには学生が暮らすには贅沢過ぎるマンションだ。

都心に程近い高層マンションの一室。オートロックで警備員も配置されていて、安全性は保障されている。3LDKで、部屋の一つ一つも広く作られているし、加えてペットも飼える。これだけ設備の整つた、しかもまだ新しいマンションとなれば当然、家賃だって普通の学生が住むようなアパートなどと比べると随分と高いものになる。その額が一倍や三倍ではないことは確かだ。

だけどここはガレットが一人で暮らすのに、と選んでくれた場所だから絶対に、手放したくはない。

ガレットがいない今、ここは唯一ガレットを感じていられる場所なのだ。なのに、どうしてこの場所を自分から手放すような真似が出来るだろ？

「引っ越しなんかするつもりはないわ。ガレットだって、そのうちひょっこり帰つてくるかもしれないじゃない。いつもみたいに、ただいまーつて。その時ここに知らない人が住んでいたりしたら、ガレットがびっくりしちゃうでしょ？」

「あははっ、死んだ人を待つの？ 来ないよ、彼は死んでるんだから。随分と入れ込んでいるんだね、ガレットに」

ヘザーは心底楽しげに笑つて言つ。

この手の発言はもう意見の相違だと思つて全部聞き流すことにした。ガレットが死んでいるとか、確証もないのにそんな話はしないで欲しいし、聞いているとやつぱりかなり腹がたつ。けれどそれも仕方がないか、とあたしは一つ溜め息を吐いた。お互い、根本的に前提としている部分が違うのだから。

一方はガレットが死んでいることを前提に話し、もう一方はガレットが生きていることを前提として話しているのだから、話が噛み合はないのも当たり前のことだ。そういうふうに思つていれば、ヘザーの言葉もある程度までは割り切れる。

それとも、異世界の人間を相手にしているのだとでも思えばもつと気にならなくなるだろうか。

「その言葉の使い方、間違つてゐるわよ、ヘザー」

ちょこんと鼻先を突いて続ける。

「ひついうのはね、『入れ込んでいる』じゃなくて『惚れ込んでいる』つていうの」

にやりと笑つて、あたしはひつひとつ伸びをした。

「あつそ」

呆れたよう言つて、ヘザーはわずかに口角を上げた。

仕方ないなあという感じの、年下にされると心底憎たらしい笑み。好きにしなよとでも言いたげな憎たらしい顔を一度むにっと軽くくつねつて、あたしはソファーの上に放つていた鞄をつかんだ。

「バイト、行つて来るね」

「日曜日はバイト休みなんじゃなかつたつけ？」

「バイトの先輩に今日だけ代わつて欲しつて言われたの。それじゃあヘザー、お留守番よろしくね。行つてきます」

ヘザーの傍にはこつも、オーデランジュ・ヴェルトの香りが漂つている。

……ああ、と呑けてしまつた。

2

「 やあ、よく來たね」

奴は右手を上げ、親しげに微笑んでそつとつた。紡がれるお氣楽な口調に、ガレットは思わず目を見開く。

ああ、そうか。

俺は謀られたのか。

なんて間抜けな。

よく考えればすぐに気付けただろうに。」

奴の後ろにすらりと控える厳つい男たち。いつもながら最初から仕向かれていたのかと、今更になってようやく気が付く。にっこりと、心底楽しそうに笑むその小柄な男。こんな奴に、俺は操られていたのか。ずっと奴の手のひらの上で、愚かにも無様な道化を演じていたのか。

この現状に、思わず嘲笑めいた笑いを漏らしてしまつ。

ああ、これが夢ならどれ程いいだろう。

「とつても可愛い僕のマリオネット。君は僕と、遊んでくれるんだろ？？」

そう言って、俺を招き入れるかのように大きく両腕を広げた。

背景さえ違えば、もしかしたら感動の再開にも見えたかもしない。若い恋人たちか、それとも十数年ぶりに出会った友人たちか。奴はまるで、感動的なドラマや映画のワンシーンを演じているかのようだ。ただ、その相手役を強引に割り当てられた俺だけは、酷く覚めきっているのだけれど。

本当に、これが夢なら、と思つ。

こんなにも酷い夢なら、そのこと覚めない方がいいのかもしれない。

現実で起こりうる恐怖の中で怯えているよりも、夢の中でその恐怖を味わっていた方がきっと随分と楽だろう。…残念ながら、今自分が居るのは現実世界だと理解してしまっているのだけれど。

「……随分と、盛大なお持て成しだな」

「素敵なパーティーだろ？でもね、飾り付けがまだなんだ」

これから真っ赤な血の花を飾るんだよ、という奴の言葉に、俺はとにかく特攻していくことに決めた。

これから始まる戦いに、流れるであろう血液に、奴は今まで見たことがないくらい興奮している。まるでセックスをしている時のように

なうつとりと陶酔しきつた表情に、ぞくりと背が泡立つよつた恐怖を感じた。

そして自分に勝ち目がないといつことも、同時に悟った。

だけど尻尾をまいて逃げだすよつた恰好の悪いことだけはしたくない。

どうしたつて負けることくらい分かり切つてはいる。けれど、負け

犬なりにプライドもあるし意地もあるのだ。

だから、とにかく玉碎覚悟で正面から挑む。

精々頑張つてみよう。

死の宣告に来た小柄な死神に盾突いて、足搔いて、もがいて、生を勝ち取つてやる。この現状で、果たしてどれだけの時間生き延びることが出来るのかは分からない。分からなが、とにかく今の俺に出来ることはただ一つ。

「…精々、足搔いてやるよ」

今俺に出来ることは、取り敢えず一人でも多く奴らを地獄に堕とすこと。

## 約束を貴方に（前書き）

この章には男性同士のキス、暴力的表現があります。恋愛等が絡んでいる訳ではありませんが、苦手な方は「」注意ください。

ねえ、『エリカ』の花言葉って知っているかい？

0

1

「エリカ、これあげるよ」

そろそろ寝ようかと一人でベッドに入ると、ガレットはダブルベッドの下から小さな紙袋を取り出して、あたしに手渡した。渡しながら、いつも寝る前に服用している白い錠剤をぽんと口に入れ、水で流しこむ。詳しくは知らないけれど、何かのアレルギーを抑えるための薬だと聞いた。

小さな袋の中には、可愛らしく包装された小さな箱。その箱の中には、緑色の小さな瓶。ちゃぽん、と中の液体が音を立てて揺らいだ。

『オードランジュヴェルト』

……香水？

「どうして？誕生日でもないのに」

言つと、ガレットは笑つた。俺の一番好きな香りなんだ、と。そして少し貸してね、とあたしの手の中にある小瓶に手を伸ばす。

「だからいつも、身に付けていて。とても優しい香りだから」

言いながら小瓶のふたを開けると、あたしの髪をゆるくまとめているシュシュに爽やかな甘い香りを吹きかけた。少し前までは香水の香りは甘つたるくて嫌いだと思っていたのだけど、この香水の香りは清々しくて嫌じやない。シトラス系の、綺麗な香り。優しく甘い笑顔を浮かべ、ガレットはそれに口付けをした。

「……肌、弱かつたよね？」

「あ、うん」

髪を撫で、もう一度口付けをし、ガレットはあたしをきゅっと抱きしめた。

「……」

「何があつたの？」

ガレットは何でもないよ、と左右に首を振る。そしてあたしから一步離れた。いつも通りの、気の弱い笑み。あたしはこの軟弱な表情が大好きなのだ。彼の優しさを表す、控えめな笑み。ああ、なんて愛しい。

「肌が弱い人は直接肌にはつけないで、アクセサリーとかハンカチに振りかけて使うと良いんだって。あと、洋服の裾とか。そうしたら、肌も荒れないですむからって、店員さんが言つてた」

「ありがとう」

癖のある茶に近いブロンズの髪は柔らかく、ワックスを付けていないとふわふわと無造作に跳ねてしまつ。あたしは寝ぐせみたいに跳ねるガレットの髪を手櫛で整えながら、お礼を言つた。甘すぎないシトラスとウッドの香りが、ふわりと静かに漂う。

「……素敵な香りね。穏やかで、まるであなたみたいだわ」

「よかつた、気に入つてもらえて」

いつもと変わらないその表情は、どこか憂いを帯びていて。

「……本当に何でもないの？」

「何でもないよ。ただ、明日から仕事で少し家を空けるだろ？ だから、その間寂しくないよう、に」と思つてさ

「今までだつて何度かあつたじゃない」

けれど、優しく微笑むその表情は、どこか悲しげに歪んでいた。

「……ガレット」

「ん？」

その胸に、今度はあたしから抱きついた。細身で、けれど良く鍛えられた身体。しつかりとしたその胸板に、あたしは顔を埋める。ねえガレット、あたしは何も言わないよ。どんな時でも、いつでも、あたしはあなたを待つているよ。絶対に、あなたに背を向けたりな

んかしない。あなたの事なら全部、真正面から受け止めてあげる。何があつても、どんなに酷いことが起きたとしても、あたしはあなたの味方だから。

……だから、お願ひ。何があつたときは、あたしを頼つて。

「あたしは、ガレットの傍にいるよ」

「……うん」

「あたしは絶対に、貴方から逃げたりなんかしないから」

「うん」

「何も話さなくとも良いよ」

「うん」

……だから、お願ひ。

「だから、」

お願いだから、あたしを頼つて。ほんの少しで良い、あたしに、

寄り掛かって。

「……っ」

言葉が、出てこなかつた。

言葉にしてしまつと、何がが壊れてしまつよつた氣がした。

「……大丈夫」

あたしの心を察したように、穏やかにガレットは呟いてあたしの頭を撫でた。

「俺は今でも、エリカには十分助けられている。何があつてもエリカだけは俺を裏切らないでいてくれることも、ちやんと分かっている。最後まで、俺を信じてしてくれるつてことも。俺がエリカを愛しているのと同じくらい、エリカも俺のことを愛してくれているのもちゃんと知つていいよ」

だから

……

後に続いたその言葉に、あたしは無言で頷いた。

だから、こつまでも俺の『博愛の花』でいて……。

もう、口を開くことさえ苦痛だ。

体中に出来た痣は、じくじくと鈍い痛みを放つ。体中に刻まれた傷は、たらたらと鮮血を流す。

「どうしたの？ 嘴呼、傷が痛むのかい？ そうか、可哀そうにね」  
酷く演技じみた台詞を吐きながら、俺の腹に蹴りを入れる。その周囲で、厳つい男たちは豪快に笑い声を上げた。こいつ等もさつきまでは奴と一緒に俺をいたぶっていたのだが、ここからは一人でやらせてよ、という奴の一声に壁際に寄つた。予想が外れた。まさか、奴がこんなにも高い地位にいたなんて。こんなのは初めてだ。ここまで、見事に裏切られてしまうなんて思つてもみなかつた。

鳩尾に鋭い衝撃が走つたとの同時に、ひゅつ、と喉が細く息を漏らした。咳込み、あまりの激痛に意識が飛びそうになる。苦しくて息が出来ない。どうやら肋骨が折れたようだ。：左腕、両足、それから肋骨が、多分四本か五本。他にも折れているところはあるだろうけど、ただ、それすらも分からなくらいに体中が痛い。体が動かない。くそつ、視界がかすんできた。

「ねえ、今どんな気持ち？ 悔しい？ 苦しい？ それとも、痛すぎてもう意識が飛びそうなのかな？ ねえ、教えてよ。今、どんな感じなの？」

黙れ。へらへらへら笑つてんじゃねえよ、氣色悪い。人の血を見て喜んでいるなんて、心底趣味の悪い奴だ。前から趣味も根性も悪い男だとは思つていたが、これほどまでとは思わなかつた。全く、こんな体じや抵抗することすら出来やしない。いい加減にしり、この野郎。

「すゞく綺麗だよ、ガレット。ぞくぞくする。鮮やかに色付く赤。上質な赤ワインよりも輝くルビーよりも華やかに咲く赤。：ホント、

生きた人間から流れ出す血液ほど美しいものはないよねえ」  
それが美しい人間のものであればなおさらね、と奴は長い指先で俺の頬に刻んだ傷をなぞりながら言った。

なんて、気持ち悪い。

「こいつは狂つていいのか。

それにして、こんなにやられっぱなしでは気に食わない。

「何か、反撃は出来ないだろうか。体中、傷だらけで上手く動かない。だけど、右手だけはまだ辛うじて動く。  
どうにかして、奴に一矢報いてやることは出来ないだろうか。

「……ッ！」

髪を攫まれ、顔を上げられた。

「傷だらけだね。もつたいない」

酒臭い息を吐きながら、奴は俺を見て笑つた。せっかくキレイな顔をしてるのに台無しだね、と。言いながら、ウイスキーの瓶を取り、ぐいっと煽る。

「……なあガル。ガレット。最期なんだからさあ、なんか言つてみろよ」

俺の頭を床に叩きつけ、手を離す。そして憎たらしく、忌々しく、奴は言った。

「人生最後のお願い事、内容によつては叶えてやつても良いよ？」  
その言葉に、俺は顔を歪めた。この男に叶えられる願いなど何も……。

「……ああ、そうだ。

胸元を抑え、苦痛に耐える。

「……じゃあ、……ひとつ」

息も絶え絶えに口を開いた。

苦痛に耐えきれず　苦痛に耐えきれなかつたように見せかけるため　咳き込み、荒い息を吐いて俺は体を丸めた。そして、気が付かれないように胸ポケットから取り出した白い錠剤をいくつか口に含んだ。

「なあに？」

「……さい、『』に、キス、して……く、れ……」

その言葉に、奴は驚いたように目をまん丸に見開いた。そして不器用な学生みたいに笑つて、良いよ、と答えた。

「ガレットにそんな趣味があつたとは知らなかつたよ。でも、いいよ。そのくらいのお願い事なら僕でも叶えてあげられるよ。だけどさあ、僕の唇はすぐおーく貴重なんだよ。だから、感謝してよね」口に含んだそれを俺はガリと噛み碎いた。強烈な苦みが口内に広がる。奴は丸まつている俺を仰向けに寝かせると、恋人にでもするよう俺の髪をふわりと撫でた。その不似合いな優しい手つきに、俺は一瞬眉をひそめる。

「それじゃあ、オヤスミ」

横になつたままじややり難いから、と奴はぐつたりとして力の入らなくなつた俺の体を抱え上げ、唇を重ねた。たつたそれだけのことなのに、体中に激痛が走る。

俺は舌を出し、奴の唇を割るようにして口内へと侵入させた。…一緒に、噛み碎いた錠剤も。味覚が麻痺するほど酒に酔つているのだろうか、強烈な薬の苦みにも奴は顔色ひとつ変わらない。それとも、血の味と混ざつているせいによく分からなくなつているのだろうか。とにかく、執拗に唇を重ねた。

ぴちゃぴちゃと、醜く濡れた音が耳を犯す。

「…………んつ」

奴がかすかに声を漏らした。頭を離されないように、俺はどうにか動く右手で奴の頭を固定し、舌を絡め、キスを続けた。そして、奴が薬をたっぷりと含んだ唾液を呑み下したのを確認してから唇を離した。奴の呼吸が荒く乱れている。俺を床に寝かせると、奴はにっこり笑つて口元を拭つた。

「随分と情熱的なキスをするんだね、驚いた」

「俺は……お前が、キス、に……慣れ、てないのに、驚い、たよ」慣れていそうなのに、という言葉は奴の蹴りのせいで出てこなか

つた。うるさいよ、と言つて俺の腹をまた何度も蹴りつける。ぐいっと酒を煽る姿を見て、俺はひとつ息を吐いた。酒のボトルは、もうほぼ空になつてゐる。

「……つ！？」

力クン、と奴は崩れた。まるで糸の切られたマリオネットのよう。飲ませたのは、いつも服用している催眠剤。

「…な、にを…したつ

うずくまり、脂汗を流す。

催眠剤はアルコールと共に摂取すると、急激な中枢神経の抑制作用が引き起こされて昏睡や死亡の危険性があるのだ。薬を処方されたときに医者から言われた『絶対に酒は飲むな』という言葉を思い出し、俺は腹の中で拳を握る。

奴は胸元を抑え、苦しげに不規則な息を吐く。

薬を噛み碎いておいたためか、利くのが早かつたようだ。周囲の男たちは奴に駆け寄ると、何をした、と俺に叫んだ。俺にはもう答える気力などなかつた。呻くことすら出来やしない。

答えると、男たちは俺の胸倉をつかむ。ぎしと、骨が軋んだ。

「た、だの……催眠剤、だ」

答えながら、思つ。

この中に、誰か医者を呼びに行くような賢明な奴はいないのだろうか、と。上手く処置をすれば奴だつてまだ助かる可能性があるといふのに。ああ、けれど莫迦の集まりと言つるのは御しやすくて良い。もう死きた気力を無理やりに引っ張り出して侮蔑した笑みを向けると、激怒して揃いも揃つて俺に攻撃を開始した。

やつぱりトップが居なくなると呆気なく崩れていくものなんだな、と俺は愚かな男たちを見上げた。すぐ横で苦しんでいる奴の事などすっかり忘れてしまつたように、男たちは俺に攻撃を加える。くたばれ。何を笑つてゐる。気に食わない。死ね。

俺への一方的な暴言が飛ぶ酷い喧騒の中で、奴は崩れ落ち、瞼を閉じた。まだ死んではない。ただ昏睡状態にあるだけだ。しかし、

この状態では息を引き取るのも時間の問題だろ？

そうだ。早くに意識を失つてしまつた方が良い。その方が苦しまず  
に済む。

ああ、俺ももうすぐだ。

せめてもの償いだ。且一杯苦しんでから逝つてやろ？ 裏切られた  
とはいへ、かつて仲間だった者を先に逝かせてしまつたことへの償  
い。何よりも不自然に、童話のように朽ち果てよ？  
一人が大きなナイフをとり出し、きらりと光らせた。ああ、あれで  
刺されて、俺は死ぬのか。

エリカはまだ、俺の帰りを待つて居るのかな。あの家で。今どうし  
ているんだろう？ この時間だつたら、今はまだバイト中かな。それ  
とももう、家に帰つてくつろいでいることだろ？  
もうすぐ終焉を迎える俺の日には、ありきたりな小説やドラマみた  
いに人生の走馬灯なんか見えやしない。思い出すのは、想うのは、  
どれもこれもエリカの事ばかり。

あたしが、死に際に『生きていて欲しい』って言つたら？  
しばらく前の、エリカとの会話。

あのとき、俺は何と答えたんだつたつけ。

…ああ、そうだ。どうするだろうねと呟いて、そして、こう言つ  
たんだ。

それじゃあ、君の死体を冷蔵庫の中に入れて毎日話しかけるよ。  
そうしたら生きていけるんじやないかな。  
これはきっと、そうでもしないと生きていけない、という意味だつ  
たのだろう。

だけどこれは裏を返せば、エリカさえ傍にいれば生きていけると  
いう意味にもなる。帰れば、家にはエリカがいるのに。  
ああ、こんなにも愛しいなんて…。

「さあ、そろそろお休みの時間だ。俺達のファミリーを…うちの若  
を殺した罪は限りなく重いぞ」

服のはだけた胸元。言うことを聞かない傷だらけの体。心臓の真上

にあてがわれた大きなナイフ。まだ奴は死んでなんかいねえよと心中で呟きながら、この命はあと何秒持つのだろうかと俺は酷くつまらないことを考えていた。

「死ね

ぐさり。

何か呆気ないほどに、静かに死は訪れた。

蹴られても、刺されても、殴られても、もう痛みも何も感じない。もつと痛いのだと思っていたのに。

そうか、これで、俺は死んだのか。

……エリカは気が付くだろうか。

あの香水の持つ意味に。

どうかどうか、気が付かないでいて……。

瓶の底に刻んだ、あの言葉には……。

・

「えっとおー、皆さんにいー、大事なお知らせがあります」のほほんとした表情のその男の口から出てきた言葉は、そのへらへらと緩んだ顔からは全く想像も出来ないくらい酷い内容のものだった。

「今まで、なんとかかんとか警察の介入を防いできた我がアブレイクス・ファミリーなんですが、なんかもう防ぎきれないっぽい状況でーす。さらに二一人程、ここに潜入捜査に入つて来てる奴もいるみたいでーす。

ちなみに、その捜査官の一人はこの僕でーす。あつはーつ、みんな驚いた？ びっくりした？

えへ、などと言って可愛らしく舌を出す童顔の男に、その部下達はあんぐりと口を開いた。どれもこれも、およそマフィアの若頭とは思えない台詞である。しかも事実上このグループを統括しているのはこの若頭であるというのに。一方本物のボスはというと、もうほ

とんど隠居暮らしで顔を見せもしない。猫を抱いて暮すんだと言いつて、部下達の言つことにも耳を貸さない。

本来ならば、世代交代をする際には必ずそれに見合つた大きな式を行つものだ。だが、そのボスは別に良いじゃん、と何もせずに隠居暮らしを始めてしまつたのだ。その所為で、まだ『若頭』という立場に居ながら、この男はマフィア全体を取り仕切ることになつたのだ。

「あ。でも、安心して。もちろん本業はこいつだからさ。向こうはただのカモフラージュ。副業だよ。敵対している組織を法的に潰せるとしてもお買い得なお仕事だね。

で、これからが本題なんだけど、その勇氣ある潜入捜査官 ガレット・コールマンつてば実はかなりの切れ者でさ、正面切つて争つたらこいつがちょっとばかし危ないことになるかも知れないんだよね」

言つて、にこりと笑う。

「だけど、こいつは向こうの正体を知つていいし、いくらでも策を弄する時間はある。僕にはこっちに都合のいいように策を練り直させることだってできる。なんたつて、僕はあいつのセンパイだからね。

だから、みんなに相談。やつぱり我がアブレイクス・ファミリーに盾突こうなんていう命知らずなお馬鹿さんは早めに消しておいた方がいいと思うんだけど、みんなはどうやってやれば良いと思つ?」

幼さの残る口調で、朗らかに続ける。

「とつてもかわいい僕の後輩君だもの、とびっきりのフルコースを用意してあげなくちゃいけないよね。それこそ、あの気丈な精神が壊れて、永遠に残るトラウマを植え付けるくらいに。僕たちで一生眠れなくなるくらいの、発狂して恐怖で動けなくなるくらいの、すごい記憶を刻み付けてあげようよ!」

三十路間近の若頭は、とても晴れやかな笑顔でそう言つた。

この戦は勝利を飾るものだと信じて疑わずに。全てが、自分の思い

描いたようになると想いこんだままで。

全てが全て、幼い妄想なのだと気付かずに。

戦は終わった。

両の大将が相討ち、命を落とすと言つ最後。

悲惨に、無残に、醜く、愚かに、一つの命が消えさつた。

大将を失つたマフィア内で、しめやかな葬儀が執り行われた。

仮の名は、アスカ・アブレイクス。

二人の職員を失つた会社内で、名簿から一人の名が消えられた。

### 3

二人の職員を失つた会社内で、名簿から一人の名が消えられた。消えた名は、『ガレット・コールマン』と『アスカ・バルザック』。その一つの名は、社の規定により速やかに削除された。その死は巧妙に隠蔽され、その人間はもともといなかつたことにされた。

『仕事内容 マフィアへの潜入捜査・撲滅、その他特殊任務』

警察の中で秘密裏に作られた特殊部隊。特殊任務課。

そこはFBIのように、おおやけに知られているような組織ではない。

警察内部の組織でありながら、それは独立したひとつの中のような扱いになつっていた。社員全員に徹底した守秘義務が課せられており、それを果たさない者には死にも等しい制裁が待つていて。

自由は、ほぼ完璧に与えられるではない。たとえそれが、退社後であつてもだ。職場から離れても、監視の行き届いた寮での生活が寮でなくともGPS等で監視される生活を余儀なくされることとなる。

もつとも、無事に退社出来ればの話だが。

特殊任務課への入社条件は、三つ。親類がないこと、五ヶ国語以

上の日常会話が可能なこと、そして人を殺すこと・自分が死ぬことに抵抗がないこと。

ここはモラルの欠如した才人たちが集まる場所。

ここでは、すべてはただの『駒』に過ぎないのだ。どんなに優れた人間であっても、一つの『もの』として扱われる。

けれど給料は破格。毎月、千万単位の給料が入り、任務の度に相当額の手当が付く。そして、毎回任務に入る前には『殉職時保障希望願い』というものを任意で提出することが出来る。殉職の際、その時に最も愛する者に保障金を与え、自分の死を知らせることができるという制度だ。

いつ命を落としてもおかしくない、死んでも葬儀にすら出してもらえないという闇に閉ざされたこの世界で、親兄弟・親類のいない社員にとっての唯一の光り。ひとを愛することを認めるための制度。これは特殊任務課の社員たちへ唯一与えられた情けであり、慰めだつた。

その闇の世界で、二人の人間は消し去られた。

一人は、いない人間として。一人は、影の世界に名を残して。すべては、消え去った。

0

例えはとても大切な人が、自分の目の前で、自ら意志で、自らの手で命を絶つたとしたら。そしたら、あなたはどうする？

1

物心がついたとき、あたしはすでに一人だった。  
両親とも他界していて、あたしは酷く厳しい先生のいる施設で育てられていた。

### 『ミス・カフフ』

そうやつてあたしの名を呼ぶ先生たちは、いつも侮蔑するような目であたしを見ていた。決して笑わず、決して泣かず、という塵ほども可愛げのない無口な子供は、大人たちにとつてある意味脅威だったのかも知れない。もしかしたら未知の生物のよう、怪物のように見えたのかもしれない。

何もかも見透かしているようなあの黒い瞳が怖い。

感情が欠落しているようで、氣味が悪い。人間ではないみたい。

一度、先生方がそうやつて話しているのを聞いたことがある。

やっぱり本当は人間なんかではなくて、あたしは何処か違う、異世界からやってきた別の生き物なのかもしない、などと思った。まだ年端もいかない子どもだったのに、自分で自分のことを怪物などと思って生きていた。

薄気味悪い、異形の、未知の生物。

あの時あたしは、自分はそういう生き物なのだと思つていた。

そんなあたしに、周囲の大人たちは冷たいまなざしを向けるばかりだった。だから捨てられたんだなどと言つ者もいたくらいだ。

あたしの親は死んだんだ、あたしを捨てた訳じやない。

心の中でそうやって言い返すことで、あたしはなんとか平静を保つていた。

それに、いくらなんでも、自分の子を薄気味悪いだの気持ち悪いだのと言う親なんかいないだろうと思つ。でももし、そうだったとしたらと考えると凄く怖い。

その当時、あたしが友人と呼べる人は、心許せる人はただ一人、同じ施設に居た二つ年上のお姉さんだけだった。病氣がちで、小柄で、とても纖細なガラス細工みたいに綺麗なお姉さん。白くて細くてふわふわしていて、いつも、まるで妖精みたいな人だと思っていた。何か理不尽なことで酷く怒られたりしたとき、彼女はそれでも一切表情を変えないあたしの頭をポンポンと慰めるように叩き、よく耐えたねと微笑んでくれた。

それが、一体どれだけあたしの支えになつただろう。

いくら怒られても叩かれても、その先には優しい掌が待つてゐる。

そう思うだけであたしはいくらでも耐えることが出来た。あたしよりも小さな彼女の手が、あたしにはとても大きく感じられたものだつた。

……だけど、どうしてだらう。彼女が死んだとき、あたしの眼からはほんの一筋の涙すら出てこなかつた。

もし自分が大切な人が自分の目の前で、自らの意思で、自らの手で命を絶つたとしたら。そんなとき、あたしは一体どうすれば良かつたのか。

エリカちゃんごめんねと泣きながら、彼女は自分の腹にナイフを突き立てた。刃渡り十センチにも満たないはずのそれは、殺傷能力な

んてまるで無むをそうな小さなナイフは、小柄な彼女が持つと、じつごつとしたとても大きな凶器に見えた。

痛くて苦しくて、もう生きているのが辛いんだ、と彼女は笑つた。笑顔のまま、この世から去つていつた。

どろりと、血が、流れた。

あたしは、何も出来なかつた。その瞬間を見て、立つていられなくなつた。その場に座り込み、誰か来るのを待つていて。声すら出でこなかつた。死なないでと叫ぶことも、どうしてと問い合わせることもできず、倒れている彼女に駆け寄ることもできず、あたしはいつもでも呆けていた。

その様は、異常。

薄暗がりの部屋、立ち込める血液の臭い、腹に包丁を突き立て横たわる少女。

それを眺める、あたし。

様子を見に来た先生によると、あたしはまるで人形のようになつていたらしい。動かず、しゃべらず、泣かず、だらりと腕を垂らしていた。ただ手を引かれるままに動いていた。お葬式のときも、あたしは一切泣くことはなかつた。

なんて薄情な子なんだらう、あんなに可愛がつてもらつていたのに。

あの子には感情がないんだね、ちつとも悲しくなんてないんだよ。

そのとき、先生方の嫌悪は恐怖に変わつた。彼らの中で、あたしは感情を持たない生き物、動物となつたらしい。いや、感情を表す尻尾すら持たない、動物以下の存在になつたのだ。

エリカ・カフラは表情がなく、喜びも悲しみも一切感じない。身近な人がなくなつても、辛い、悲しいなどという感情を持つことなどない下等な生き物なのだ、と。

そんなわけあるか。悲しくて悲しくて、今にも消えてしまいそうなのに。

この時、あたしは十五歳だった。

人の死がどういうもののかだつて、十分に理解できる年齢だ。彼女はもうあたしの傍にはいないのだ、もう決して会うことはできないのだ。そう考えるだけで、凄く辛かつた。それから一週間、あたしはほとんど眠ることが出来ず、ほとんど食事を取ることも出来ず、部屋の隅で膝を抱えて過ごしていた。

『誰もあんたのことを可哀そうだと言わないから、いじけているんでしょ』『う』

先生に言われたのは、その言葉。

可愛がつてくれたお姉さんが死んだときに涙も見せないような子が、慰めてもらえると思つたら大間違いだ。そう言つて、鼻で笑つた。あたしを、小賢しいと言つた。いくら十五の子供だとて、そんなくだらないことでいじけたりするもんか。泣かなかつたら悲しんではいけないの？

感情を表に出さなかつたら感じてはいけないの？

思つて、あたしは施設を出た。住み込みで家政婦のアルバイトを始め、通つていた高校を辞め、定時制の高校に編入した。学費も全部、自分で稼いだ。あたしには表情が欠如しているらしいと、鏡の前で表情をつくる練習もした。たくさんの人を觀察し、人はどういう時に笑うのかという研究もした。

今でもそんなに表情豊かな方ではないけれど、以前と比べればよく笑うようになつたと思う。きっと、表情をつくることに慣れてきたのだろう。ただやつぱり、涙だけは出て来なかつたけれど。

どんな話も、どんな言葉も、あたしの涙腺を緩ませることはなかつた。

だから、あたしは一つ、何かを信じることにした。

それは神でも天使でもイエスでも予言者でもなく、自分を守つてくれるもの。

それは人であつたりものであつたり、そのときによつて変わつてく  
るものであつたけれど、その時々でそれを心から信じることにした。  
そしてそれを、あたしは心の中で“神”と呼んだ。

あたしだつて、心から信じているものに裏切られれば涙の一つく  
らい流れるんじゃないかと思つたから。結局、あたしを泣かせるも  
のなど一つもなかつたけれど。

誰もが、離れていた。

あたしから離れていかなかつたのは、たつたの三人。  
綺麗な髪の女の子と、家を持たない老人。そして教会で出会つた警  
察官。その三人だけは、いつもあたしを迎え入れ、あたしに笑顔を  
向けてくれた。

あたしはいつも、彼らの為に祈りをささげた。  
初めは、美しい友人の為に。

『エリカは本当に綺麗ね』

彼女はいつも、そう言つてくれた。あたしはいつも、彼女の幸せ  
を願う。

次に、それから出会つた老人の為に。

『お前の信心深さには頭が下がるよ、黒髪の天使さん』

彼はいつも、そう言つてくれた。あたしはいつも、彼の未来を願  
う。

そして、とても愛しい恋人の為に。

『愛しているよ』

彼はいつも、そう言つてくれた。あたしはいつも、彼の喜びを願  
う。

あたしはいつも、いつまでもこの三人を心から信じよう。彼らが、  
あたしから離れていかないでいてくれる限り。信じ続けよう。崩れ  
かけの、この寂れた教会で。

そこであたしは、その三人の神の為に毎日毎日祈りを捧げた。

『いつもあたしを見つめ、守つてくれるこの三人をどうかどうかお  
守りください』

誰に祈つていいのかは、最後まで分からなかつたけれど。

2

いつからだらうか。

眠ると、俺は必ず悪夢を見る。

ベッドに入り、目を閉じる。そしてうつらうつらと浅く眠りに落ちそうになると、必ずと言つていいほど不快なイメージが瞼の裏にじわじわと滲み出してくる。その度に俺は嫌な汗をかき、荒く呼吸をしながら飛び起きるのだ。

世界中のすべてが消えてしまい、この世にただ一人、俺だけが取り残される夢。ぽつねんと一人生き伸びる夢から飛び起きて、辺りを確認し、窓の外を見る。街灯や、車のライト、建物から漏れる小さな明かり。多くの人が活動をしているその状況を見て、いつも通りの全てを見て、何一つ消えてはいないのだと確認して俺はようやくほっと息を吐く。ほとんど毎日が、その繰り返しだつた。

俺は多分、一人になることを極端なまでに恐れていたのだと思う。幼いころ　ちょうど、物心の付いたころに俺の母親は消えた。死んだ、ではない。消えたのだ。ある日突然、姿を消した。詳しいことは知らないが、以前から心を病んでおり、長く通院していたという話を父から聞いたことがある。今頃はきっと、何処かで息絶えていることだろう。

しばらくして、父親が死んだ。交通事故だった。

その後、俺は叔父の家に引き取られたが、叔父も、ほどなくして死んだ。遺体の状態が明らかに異常だつたため、殺人だつたのではないかと言われている。犯人はまだ捕まつていない。

そうやつて、俺は六人の親戚を殺した。不思議なくらい、俺と関わる人間は次々に死んでいった。じわじわと自分を侵食していく黒い恐怖。

半年間、俺は家に引きこもつていた。自分は呪われているのだと、

悪魔に憑かれているのだと思った。そしてその後、久方ぶりに言った高校で、何かが壊れたように暴れまくった。気が付いたら窓ガラスを割っていた。気が付いたら、身に覚えのない金が手の中にあった。自分のものではない血液が服についていた。いつも、その行為をしている時の記憶はない。気が付いた時には、何もかも終わっていた。

そして、その後にはいつも手錠がかけられていた。俺はその相手が誰なのかも覚えていなかつたというのに。

何度も目の逮捕の時、俺はようやく落ち着いてきた。何がきっかけだつたのかは忘れてしまつたが、とにかく、俺は大人しくなつた。そして、夢を見るようになつた。いや、この夢がきっかけだつたのだろうか。

いつも夢に見るのは、自分の記憶。

じわじわと大切な人が一人ずつ消えていく、一人ずつ消していく、俺の記憶を重ね塗りしていくような、朦朧と傷口を更にえぐついくようなおぞましい記憶。夢だとしても、思わず絶叫してしまいそうになる。

夢から覚め体を起こした時には、ぞわりと体中に鳥肌が立ち、酷い吐き気に襲われる。俺はこれを『眠リアレルギー』と呼んでいた。人体の約七割を占める水分がアレルギー源となつている人もいるくらいだから、人間の生理的欲求の一つである眠りがアレルギー源だと言つてもそうおかしなことではないだろう。

俺は一人だと、その恐怖からか眠ることができなくなつた。一人暮らしの自分の家では静けさがひたひたと恐怖を運んでくる。けれど人のいる明るいところでは、すぐに眠りに落ちることが出来た。何故だかおかしな夢も見ないで済む。きっと、安心できるからなのだろう。

この症状が出初めのころは、本当に疲れなかつた。少ししてからは用もないのにわざわざ電車に乗り、そこで仮眠をとることでしのいでいたが、俺は次第にこの奇妙な病を抱え、友人の家を転々とする

よくなつた。頼むから寝かしてくれ、と。そして友人のベッドを占領して、気がついたら二十時間以上を眠り続けていたこともある。その友人はとくに、俺から布団をはぎとつてベッドの下で丸まって睡眠を取つていた。

そうして、何時しかついたあだ名は『眠り姫』。

姫などという柄ではないが、確かにそう呼ばれてもおかしくないほどに俺は眠りこけていた。目を閉じてすぐに深い眠りに落ちなければ、悪夢は必ずやつてくる。今では少し強めの催眠剤を服用することで解決したが、当時は本当に気が狂いそうだった。もういいと自棄になつて十日近く眠らずに過ごした時など、これは自殺にも近いと自嘲し、いよいよ医者に行つた。

医者には、これ以上眠らずにいたら精神が崩壊すると言われた。それどころか、この時の状態で精神が崩壊していないのが不思議なくらいだつたらしい。催眠薬を処方され、カウンセリングを受けることを勧められた。結局、最後までカウンセリングを受けることはなかつたけれど、自分が『異常』なのだと認めることができたのだ。

この時の俺はまだ普通の警察官で、他人の死よりも自分の死を恐れていた。死の世界に入つて行こうとしている自分にも気付かず、死にたくないと思っていた。

警察なんて職についていながら、『もしもの時には、体を張つて貴方を助けましょう』なんて、そんな勇気は微塵もなかつた。自分を守ること、自分を庇うことにばかり精一杯で、俺には周りを見ている余裕すらなかつた。

「なんだ、もう起きたの？」

だけど、あの時から俺は変わつた。

あの時から、物を壊すことにも、他人を殺すことにも、自分を堕すことにも、一切、恐怖を抱かなくなつた。

「あーあ、もう少し眠つていてくれると思つていたのに」

目の前には、俺に馬乗りになつてている男。眠りの場を提供してくれた友人。友人だと、思つていた男。

「……何をしている」

両手首には俺が所持していた黒い手錠が掛けられ、パイプベッドの柵に固定されていた。手錠つて黒いんだね、銀色などばかり思つていたよ、と奴は笑つた。銀色なんて目立つ色の物持ち歩けるか、と俺は言い返す。

それにしても、こいつは一体俺をどうするつもりなのか。

まさか身代金目的なんかじゃあるまいな。確かに金はあるが、身内なんかいやしないのに。それなら初めから恐喝なり何なりした方が手つ取り早い。それより何より、この変態じみた格好は何とかならないものだろうか。安っぽい官能小説みたいな事をするつもりなど、俺にはさらさらないのだから。

「俺の彼女がさ、お前に一目ぼれしたんだってさ。昨日、振られちゃつたんだ」

誰が俺にどんな感情を抱いたとしても、それは俺の責任ではないだろう。そんなものは個人の自由だ。大体、俺はこいつに彼女がいたことすら知らなかつたというのに、何故こいつは俺の首に手を掛けているのか。逆恨みも甚だしい。

「お前の事、すっげー憎い。お前さえいなかつたら、俺は彼女とずっと一緒に居られたのに。お前さえ、いなれば。お前さえ……」

馬鹿馬鹿しい、だから俺にどうしろと言つんだ。

同情はするが、お前の色恋など俺には一切関係のないことだ。それに、お前の彼女にとつてはもともとその程度のお付き合いでしかなかつたつてだけだろう? 彼女を繫ぎ止めておけなかつたのは俺の責任だとでも言つのか? それともまさか、顔も知らないお前の彼女を説得しろとでも言つつもりなのか?

「なあ、死んでくれよ。俺の為にさ。そうしたらきっと、あいつは俺のところに戻つてきてくれるんだ」

その言葉にも、俺は一切の感情を持たなかつた。怖いとか、辛いとか、そういう感情は一切沸き起こつては来なかつた。ただ、なんて鬱陶しい奴なんだろう、と。

思つたのはただそれだけ。

それにしても、どれだけ馬鹿なんだお前は。戻る訳がないだろう。どこの世界に好んで殺人犯と一緒に居ようなんて女がいるんだ。いや、女に限らずともそんな人間などいやしない。戻る戻らない以前に、最初からそんなに想われてもいなかつたのに。そんな簡単なことにも気がつかないほど、お前は壊れてしまつていたのか？

取り敢えず、足を拘束されていないのがせめてもの救いだった。めりめりと喉に食い込んでくる指の感覚にもがきながら、思い切り奴の腹を蹴飛ばしてやつた。奴は呆気なく俺の首から手を離し、後ろへ飛んだ。パイプベッドの柵にガンと後頭部を打ち付け、わずかに呻いた。急速に流れ込んできた酸素の冷たさに咳込んだとき、ふと、血の臭いを感じた。そして自分の足元で動かなくなつているものを見て、

「ああ、殺してしまつたのか。

ただ静かに、そう呟いた。

俺は目覚まし時計の代わりにと枕元に置いておいた携帯電話をなんとか手に取ると、『110』を押した。プルル、と無機質な電子音がする。

『はい、110番です。どうしました』

枕元に電話を置き、少し大きな声でこいつ言った。

「友人を、殺してしまつたみたいですね。ちょっと動けないので、ここまで来ていただけませんか」

住所を言い、拘束された状態のまま警察が来るのを待つた。手錠の鍵は手の届かない所に放られている。

溜め息を吐き、俺は思った。案外、なんとも思わないものなのだな、と。自分の周囲で自分の関係者が次々に死んでいくのには耐えられなかつたのに、自分で殺しても何も感じない。

ただ、ごく普通の日常の中にいて、ごく普通に生きていて、それでも誰もが誰かを殺す可能性を持っていて、誰もが誰かに殺される可能性を持っているのだなと、俺はただ単純にそれだけを思っていた。誰もが壊れ、狂い、墮ちていく可能性を持っているのだと、俺は理解した。

なんとなく、悟ってしまった。

この時俺は特殊任務課への移動を決めた。きっともう、普通の警官の仕事など馬鹿馬鹿しくて続けていられないだろうなと思ったから。腕を拘束された状態のまま、特殊任務課に移るための条件を頭の中でひとつずつ挙げていった。

大丈夫。どれも、クリアしている。

俺は少しだけ、笑っていた。

自分の死も他人の死も、いつ訪れたとしても可笑しくはない。それならばいつそ、潔く自らの意志で危険の中に入つて行つてやる。生きるも死ぬも一つのゲーム。  
そうやって、割り切つてしまえば簡単だ。精々バッドエンドにならないよう足搔こうじゃないか。

部屋に入ってきた警察は俺の状況を見て、一瞬動きを止めた。そして俺の手を拘束している手錠を外しながら、彼等は俺を質問責めにした。

彼にやられたのか、どうして、何の為に。

どれもこれもくだらない質問ばかり。

理由は逆恨み。ただそれだけのことなのに。くだらないと思いつながらも、仕事柄これは聞かなくてはいけないものなのだということを俺は知っている。俺だつていつも、こいつらくだらない質問ばかりして食つてているのだから。俺は淡々と、事務的に答えていった。眠リアルギーの事も、彼の事も、彼の彼女の事も、全て。

大丈夫ですか。

災難でしたね。

慰めの言葉も酷く空虚で、陳腐なものばかりだった。

ああ、なんてくだらない。誰も気づかないのだな、と俺は同業者たちを眺めた。こんなにも気付き難い、こんなにも簡単なことが、そこかしこに散らばっているのかと思うと背筋が凍る思いだった。

……なあ、早く気付けよ。

お前たちだって、『可能性』を持つているのだということに。

### 3

ガレットと付き合いを始めた時、彼はあたしにこう言った。

『君は人殺しの事を好きになれるのかい?』

だから、あたしは答えた。

「あなたが人殺しであることとあたしがあなたを好きなこと、一体それのどこに関係性があるのかしら?」

ガレットは一瞬目を大きく見開いて、そしてほっとしたように微笑んだ。

もちろん、別に人殺しが好きって訳じゃない。好きになつた人が、またま人を殺したことがあつたというだけ。

だけど一度好きになつてしまつたら、人殺しだろうとなんだろうと、そんなものは嫌いになる条件になど含まれなくなる。それは過去の出来事であつて、今の出来事ではないのだから。まあ そうだったのと驚きはするけれど、そんなもの、すべては過去のことで瑣末なことだと流してしまえる。

それに、彼に語られる以前から、あたしは初めて出会つたときから彼が人殺しだということは知つていたのだ。分かつていて、しつかりと理解した上で彼のことが好きだと言つた。

毎日新聞を読み、毎日ニュースを眺めていれば嫌でも目に入つくる様々な情報。

それはとても小さな記事ではあつたけれど、確かに彼は載つていた。殺されそうになつた青年が誤つてその相手を殺してしまつた、という記事。彼が警察官であること、理由が女がらみの怨恨であること、

それだけが短く書かれていた。ニュースでもちょこちょこと見る機会があつた。結局、彼は正当防衛ということで無罪になつたらしい。状況が特殊だつたため、過剰防衛ということにもならなかつたらしい。

あの寂れた教会で彼と会つたのは、その判決の下つた五日後の事だつた。

仕事にいそしむ彼の様子は、あの事件の事など微塵も感じさせなかつた。事件の事など全て忘れてしまつたように、顔全体に無機質な笑顔を張り付けて、彼はあたしに話しかけてきた。

『君、何をしているの』

酷く穏やかな口調だつた。

あたしは驚いた。これが、つい先日人を殺したという人間なのかと。もし何も知らない人だつたら、なんて感じのいい人だうと錯覚してしまいそうだ。本当に誤つて殺してしまつたのなら、もう少し塞ぎ込んでいそうなものなのに。

『お祈りに来たのだけど、今日は入れなさそうね』

言いながら、あなたは壊れてしまいそうねと思つた。

まるでバランスの悪い積み木か、トランプのタワーみたい。ちょっとでもつついたら、ばらばらに崩れてしまいそう。あたし達は少しだけ言葉を交わした。

ああ、あなたは毎日殺伐とした世界の中にいすぎて心が壊れてしまつたのね。ヒトを殺したことですから、過去の出来事だと自分の中で処理してしまえるくらいに。泣きだしたいような衝動も、叫び出したいような悲しみも、そういう激しい感情を全部自分の中で麻痺させることが出来るようになつてしまつたのね。

あたしは、あなたに同情した。

なんて可哀そうな人なのだろう、と。すべてを自分の中に抑え込んで、まるでトランプのジョーカーみたいに作り物の笑顔を張り付けて。……そうやって仮面をかぶることで、自分を守つているのね、

と。

『大通りに出て五分くらい歩いた所にも教会があつたはずだよ。最近出来たばかりの、立派なやつが』

『そんなところに神様がいるとでも?』

おかしな会話をして、あたしは彼に背を向けた。

妙に、彼の事が気になつた。

次の日も、その次の日も、あたしは教会に行つた。祈りを捧げるためではなく、あなたに会うために。形だけ、祈りに来たのだというように裝つて。教会に行くと、あなたはいつも笑顔で迎えてくれた。それを、あたしは素直に嬉しいと感じたのだ。

作り物の笑顔だというのは、いつもすぐに分かつたのに。ほんの少しの悪戯心。ちょっとだけ、翻弄してやるつと思つた。

『何?』

静かな口付け。

驚いて身を引いたあなたが可愛くて、ああ、あたしはこの人に惹かれていたんだと初めて気が付いた。だからあたしは彼にこう言つた。

『あなたの事、気に入つたわ』

人を好きになるのに必要な条件。そんなものはないのだと、何となく気が付く。あるのだとすればそれは、自分がその人に惹かれるか惹かれないか。きっと、ただそれだけのことなのだろう。ガレットに出会つて、あたしはひとを愛しいと思う気持ちを、初めて知つた。あたしはいつも、彼に囁く。

『愛しているわ』

どうか、どうか忘れないで。

あたしだけは、あなたから離れていくことなどないのだということを。

## 終章（前書き）

「これでラストです。楽しんで頂ければ幸いです。」

0

『必ず君に会いに行くよ。  
いつまでも、エリカのことを愛しているよ。  
でもどうか、この言葉に気が付かないでいて。  
きっと君の心を重たくしてしまつから。』

愛しい人にこの言葉を贈ろう。  
決して、気付かれないよ。』

見過ぎして、見落として、ぽいと捨ててしまうようなところに。けれど、ほんの一時だけでも大事にして貯えるようなところが良いな。  
どこがいいだろ？。どうにこの言葉を残そうか。

「　　ん？」

ふと目に着いたのは、以前から贔屓にしていた香水店だった。

1

届いたのは、一通の手紙だった。

送り主は警察庁となっている。宛名は、『エリカ・カフラ』。どうして、とあたしはその封筒を眺めた。

「　ああ。それ、ようやく来たんだね」

言つたのは、ヘザー。ソファーに腰を掛けたあたしの後ろからひょっこりと顔だけを出し、手元を覗き込んでくる。そして、あたし

の横にちょこんと座つた。

「何か知つてゐるの？」

「まあ、とヘザーは笑つた。

「ガレットの死が記載されているだけだよ、その手紙は。それから、殉職の保障金を受け取るための手続きに来いつていうやつも入つてゐるのかな。多分。入つてゐるのはそんなものじゃないの？」

「どうじつこと？」

言いながら、封筒を見つめた。

「だから、言つたろ？『ガレットは死んだんだ』つてさ」

……殉職。

「いい加減にしてよ。彼が、死んでる訳ないじゃない」

「そろそろ認めなよ。いくら嘆いたつてガレットは帰つてきたりなんかしないよ。君は早く、現実を見ないといけない。……ガレットはもう、帰るつと思つてもここに帰つてくれる』とは出来ないんだから

ら

言いながらあたしの手から封筒を取り、勝手に封を開いた。そして、中から数枚の紙を取り出した。そして声に出して読み始める。

「『拝啓、エリカ・カフラ殿 殉職時保障規定に基づき、ガレット・コールマンにより 殉職時保障希望願い が提出されました。これにより、ガレット・コールマンの殉職保障金として1,000,000ドルを保障いたします。つきましては、警察庁特殊任務課までお越しください』だつてさ。ああ、『一寧に地図まで付いている

「……行かないから」

だつて、信じたくないんだもの。

そこに行つてしまつたら、そのお金を受け取つてしまつたら、彼の死を認めることになつてしまつじやない。だから、あたしは決めたのに。あの頼りない優しい笑みを浮かべることなく、しんとして静まりかえる彼を見るまでは絶対に信じないと。

「だつて、その手紙、彼が死んだなんてこと一言も書いてなんか、いない、じゃない。ガレットが死んだなんて、一体どこの誰が言つ

たのよ……」

「これだけ書いてあれば分かるだる、つてことなんじやないの？まあ、確信をつかない書き方をしてることとは認めるけど」

「だったら、行つたら彼と会わせて貰えるの？ どうせ行つたつて、手続きだけで終わっちゃうのよ。彼に会わせてもらえたきや、行く意味なんてないわ。それに、あたしはお金なんかに興味はないのよ」「手紙を封筒」と「ミニ箱に突っ込んだのを見て、ヘザーは一つ溜め息を吐いた。肺の中の酸素を全部出し切るみたいな、深いため息。

「……ガレットに、会いたい？」

「当り前でしょ」

「止めた方がいいよ。もしガレットの死体があつたとしても意味はない。そこにあるのは、ぐぢやぐぢやになつた肉片だけなんだから、本人かどうかなんて分かりやしない。それに、そんなもの見たつて気持ち悪いだけだよ」

一切表情を変えずに、ヘザーは言った。

「……なんで？」

「何が？」

柔らかな笑みを浮かべたまま、ヘザーは言った。

何をそんなに怯える必要があるの、と。

ガレットは常に、生と死の狭間に生きていたのに。今自分が存在していることが夢なのか現実なのかも分からなくなるくらい、ガレットは想を愛していたのに。

「これが夢なら早く覚めてくれ。そうすれば、俺は心おきなく死ぬことができる。

「これが夢なら早く覚めてくれ。そうすれば、本当に彼女を愛することができる。

「いつも、そう思つていたんだよ。

「……なんで、そんな、まるで自分が感じてきたことのように語る

「……、彼はあなたじゃないのよ。からかうのもいい加減にしてよ！」

その言葉に、ヘザーは楽しげに笑つた。

「嘘よ」「からかってなんかいないよ。俺は、本当の事しか言わないから」

七  
七

嘘じやなしよ、とくサ一はあたしの髪を撫でね。  
そひ、くすくす二撫戯つよく笑つよ。

「 」

そう言つて『えられたのは、とても優しい、とても身近な口付けだった。』

ふわりと香るオーディランジュヴールド。彼の周囲には、いつもこの香りが漂っている。懐かしい記憶を呼び起こす、甘い香り。

あたしは思わず、自分の唇に触れた。

わたしは思わず自分の脛に触れた

...これ

懐かしい感触に、泣きそうになつた。これは：これは、彼の口付けだ。とても優しい、穏やかで、静かなあたしの恋人。

んだ。……」」の花言葉は、知つてゐるよね？」

ヘザーは、酷く大人っぽくそういった。十歳にも満たないであろう彼の見た目からは想像もつかないくらい、穏やかで落ち着いたテノールの声。その声は、あたしを酔わせる響きを持つていて。

の花なんだよつて

あたしは気が付いた。

ヘザーが、誰なのかに。

“孤独”つていう一つの意味をね。……どんな仕事をしていた  
“裏切り”

「警察つて聞いていたけど……」

「言つたあたしに、ヘザーは苦笑した。

「うん。それも、FBIですら避けて通るような、危険な仕事を専門にする特殊部隊のね」

呆然とするあたしを余所に、ヘザーは話し続ける。淡々と、無感情に。今日の予定は、とでも言つように、その仕事の実態を語つた。「マフィアの撲滅とかを主にやつていたんだ。潜入捜査から始まって、マフィアのまねごとをして相手を安心させて、最後に、そのマフィアの頭を討つ。

この仕事はね、人を欺くことも人に危害を加えることも、人の命を奪うことでさえ、ある程度までなら許されていた。……何のために力を使うかで、嘘も、暴行も、人を殺すことですら許容されてしまうんだ、この世界は。正義を盾に、『警察』といつマフィアに所属していた

「嘘よ。虫も殺せなかつたのに」

「俺は、ウソなんかつかないよ。口を閉ざすことはあつてもね」  
どうして、あの時と同じことを言つ。人の命のはかなさを、未来を定める約束の脆さを説いたあの時と、おんなじ台詞。

ああ、彼はどれほど辛い目に逢つて来たのだろう。

虫も殺せないような優しい人が、人を欺き、人を傷付け、人を殺める。

ああ、どれほど辛かつただろう。

子供や動物たちによく懷かれる穏やかで優しい彼が、一体どんな気持ちでその仕事を続けていたのだろう。

「……それは、本当なの？」

「本當だよ。だけど、一緒に任務に就いていた奴に裏切られてね、殺されたんだ。仲間だと思っていた奴が、そのマフィアの幹部だつた。それも、ほんとトッپに近い地位にいた。

そいつから散々暴力を受けて、体中を傷付けられて死んだんだ。その後もずっと、ナイフでめちゃくちゃに切り刻まれて、蹴られて、殴られて、袋叩きにされた。最後にはもう、自分が何をされている

のかも分からなくなっていた。最後に感覚が全部なくなつて、俺は死んだんだな、つて気が付いた

「なんで、そんなに悲しいことを続けていたのだろう。なんで、少しでもあたしに頼ってくれなかつたんだろう。そんな悲しいことを、そんな淡々と語らないで。… こんなのは、辛すぎる。

「あたしを悲しませたくないで、あたしを泣かせたくないで、そうやって隠していたんだ。あたしが泣かないことぐらい、あなたは知つて居るのに」

「ごめんね。でも、君にだけは知られたくなかったんだ。俺の汚い所なんて、これ以上見せたくないかった。知らないでいて欲しかつた「なんで? どうして? ああ、でも、彼は……」。

「……それじゃあ、仇を討ちに行かなくちゃいけないわね」

「奴は死んだよ。それに、言つたる?『君は博愛の花なんだ』つて」

「そのマフィア自体はまだ残つてゐるんでしょう?」

「うん、一応ね。トップのいなくなつたあのグループが、これからいつまで持つかは分からぬけど」

「一月持つかどうだつて怪しいよ、と彼は言つた。

ならその一月を一週間に縮めてやりたいと、あたしは思つ。一日でも早く、一分でも早く、そいつらを地獄に墮としてやりたい。「ガレットは……あなたは、もしかしあが死ねつて言つたらあたしを殺して死ぬつて言つたわ。あたしに殺されるのも良いかもしけないつて、あなたは笑つていた。どんな形であれ、あたしの為に命を手放すことができるつて言つてくれた人が殺されたのよ。

… あたしには、仇を討つ権利が、義務があると思わない? そのマフィア」と、あたしが潰してやるわ」

「駄目だよ、エリカ。……君は博愛の花なんだ。裏切られ、孤独に断たれた命を、唯一癒すことができる博愛の花」

「嫌よ」

「嫌でも、駄目だよ。手を出したら君も死ぬことになる

「そんなもの、覚悟の『ええよ』

懇願するよにあたしを見つめ、困ったよつた笑みを浮かべる。

あたしはこの、頼りない笑顔が好きなのだ。

「……もし俺が、生きて欲しいって言つたら？」

「……私のマネなんかしないでよ」

「ねえ、どうするの？」

そんなの、決まつてゐる。

「生きるわよ。そんなこと言われたら生きるしかないじゃない。だけど、あなたが隣に居てくれなきゃ嫌よ。あなたがいつも、いつまでも、ずっとあたしの傍にいてくれるなら、生きていても良いわ。そうしたら、あたしは『死』じゃなくて、『生』を選ぶ

「傍にいるよ」

「口約束は嫌よ。あなたも言つていたじゃない。約束は、空虚で曖昧で、不確定なものなんだ、って。そんなの嫌よ。しっかりと確定した、絶対的な言葉じゃない限り、あたしは認めない」

やっぱり、その顔に浮かべるのは困ったような笑み。何も変わらない。あなたは優しすぎるわ。あたしの我儘にも、あなたはいつも微笑んでくれる。

愛しい人。

あたしはあなたの傍にいたこの。

「いつでも、君を見守つてこよ。傍にいることは約束できなきらいで、この約束だけは絶対に守る」ことが出来る

「遠すぎるわ」

遠距離恋愛にも限度があるわとほせへと、ザーホツ、ヒズ

た。

「『めんね。だけど、俺の行くべきと』『は雲の向いにあるから』

「分かつたわよ、さつさと天国なり地獄なりへ行けばいいわ

「仇を討とうなんて思わないで」

念を押すようなその言葉に、あたしはそんなこと思つてなんかい

ないわよ、とムキになつて言つ返す。

「……もう、一時でも私のところに戻つて来てくれたつて事だけで満足しなくちゃいけないのよ、あたしは。…そんなことくらい、あたしだつて分かつてるわよ」

「ありがとう」

『さりと、真白な翼が視界を遮つた。

「……羽？」

ヘザーはクスリと笑つた。

「似合う？」

背に現われた大きな翼を見せるよう、ヘザーは一度、その場でくるりと回つて見せた。にやりと悪戯っぽく口角を上げるヘザーに、あたしも少しだけ笑つて見せる。

「……ずっとお化けなんだと思っていたわ」

「ヒリカらしい。それじゃあ、そろそろ行くね」

「約束、破るんじゃないわよ」

「うん。いつまでも、君を見守つているよ」

羽音がした。

そして一度ふわりと白い羽を揺らして、幾枚かの白い羽を落としながら空気の中に溶け込んでいく。

最後に彼があたしに見せたのは、『ヘザー』ではなく『ガレット』の姿。彼は幻影のように揺らぐ姿であたしの額にキスをしてくれた。相変わらずの、優しい手つきで。

そして、かすかなオードランジュヴェルドの香りときらきら光る金色の余韻を残し、ガレットは消えた。

瞬いては消える金色は、ゆっくりと、時間を掛けて薄れていく。あたしはずつと、ぼんやりとガレットの消えた空間を見つめていた。涙が零れ落ちた。

一瞬、これは一体何なのだろう、と田元に触れる。

ひやりと冷たい、濡れた感触にあたしは泣いているのだと初めて気が付いた。『泣く』というのはいつ言つことなのか、と。涙が止まらない。音もなく、涙は頬を濡らす。

……ああ、ガレットは天使だったのか。

「さよなら、あたしの天使様」

フローリングの床に落ちた一枚の白い羽を拾い上げる。そして、あたしは涙に濡れた唇でそれにキスした。  
愛しい人に贈る、最後の口付けを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8944r/>

---

どこからか、羽音

2011年4月24日08時36分発行